國立政治大學日本語文學系研究所

碩士論文

指導教授：永井隆之　博士

仏教から見る中世遊女像

——小野小町・和泉式部伝説を中心に——

研究生：林怡伶　撰

中華民國一〇三年一月

仏教から見る中世遊女像
——小野小町・和泉式部伝説を中心に——

要旨

女流歌人として名を馳せた小野小町・和泉式部二人は中世の伝説において恋多き好色の女として、さらには遊女としても描かれている。遊女小町が神仏の化身とされ、衆生を引導する者としての描写が多く見られるのに対し、遊女式部は女人救済のモデルとされる場合が多く見られる。このことから、二人がそれぞれ異なる役割を担っていたように考えられる。言い換えれば、遊女像にこの二つの要素があることを示していよう。何故このような要素が見られることになったのだろうか。本論文はこの二人にまつわる伝説を用い、仏教思想の観点から中世の遊女像を探究することを試みたい。

第一、二章には、小野小町・和泉式部の伝説から遊女像の生成及び当時の遊女観について検討するものである。第三章には、中世の遊女説話の前提となっている女人罪業観と救済思想について詳しく論じるものである。第四章には、中世の遊女説話に見られる仏教女性観について確認し、その形成過程を、平安・鎌倉仏教史を踏まえて議論するものである。

各章をまとめて見てみると、遊女を名高い二大女流歌人や菩薩の化身とされることは遊女を美化していると考えられる。また、仏教側による女人布教という目的も見られる。遊女が文芸作品を通して遊女の存在価値を見出され、仏教や男性にとって重要な意義が付与されていたことを考えてみると、当時の社会では無くてはならない存在であったと言えよう。そしてこれらの伝説に付与された意義としては、凡そ以下のようにまとめられるのであろう。第一、中世の理想の遊女像が窺えることである。第二、仏教が中世の庶民社会への伝教手段を見られることである。第三、女性蔑視観を受容された女性に後世の希望を与えること。

キーワード：中世遊女像、小野小町、和泉式部、女人救済、女人罪業観

佛教所見之中世遊女像
——以小野小町・和泉式部傳說為中心——

摘要

以女流歌人聞名於世的小野小町與和泉式部二人在日本中世的傳說中被描寫為好色的女性之外，甚至還被描寫成了遊女。遊女小野小町多被視為神佛的化身或是引渡眾生者，而相較之下，遊女和泉式部則多為佛教救濟女性之範例。由此可見兩人分別肩負不同的角色。換言之亦顯示出中世的遊女像中擁有上述兩項要素。為何遊女像會有如此要素存在？本論文試將列舉二人之遊女傳說，並以佛教的觀點來加以探究中世之遊女像。

第一、二章為探討小野小町與和泉式部傳說中關於遊女像的生成以及當時的遊女觀。第三章中則詳細論述作為中世遊女物語前提之女人罪業觀與救濟思想。第四章乃先提示中世遊女物語所見之佛教女性觀，再以平安・鎌倉佛教史為背景，闡述其觀點之形成過程。

綜觀以上各章之所述，將遊女以頗負盛名的兩大女性歌人亦或是菩薩之化身等詞彙形容可視為一種美化遊女的作用。又，由此得以看出佛教對女性進行傳教一目的。遊女透過文藝作品中找出自我的存在價值，且對於佛教以及男性而言具有重要意義。依上所述，遊女在當時的社會是不可或缺之存在可見一斑。這些傳說所被賦予之意義大致可歸結如以下三點：第一、可窺探中世理想之遊女像。第二、可看出佛教於中世庶民社會的布教方式。第三、給予已受容女性蔑視觀之女性來世希望。

關鍵字：中世遊女像、小野小町、和泉式部、女人救濟、女人罪業觀

A Buddhist View of the Images of Courtesans in the Middle Ages of Japan: Focusing on the Legends of Ono no Komachi and Izumi Shikibu

Abstract

Ono no Komachi and Izumi Shikibu, the two famous female poets, are portrayed as lustful women, or even courtesans in the Middle Ages of Japan. Ono no Komachi is seen as the personification of Buddha or the messiah. Compared to Ono no Komachi, Izumi Shikibu is seen as the model of female salvation. From this point of view, the two women play different roles. It also reveals that the two characteristics are included in the images of courtesans in the Middle Ages of Japan. Why are these characteristics included in the images of courtesans? This thesis will examine the images of courtesans in the Middle Ages of Japan from a Buddhist view and will take the legends of Ono no Komachi and Izumi Shikibu for example.

Chapter 1 and chapter 2 are concerned with the emergence of the images of courtesans and the ideas of courtesans in the legends of Ono no Komachi and Izumi Shikibu. Chapter 3 analyzes thoughts on the sin of women and salvation, characteristics in courtesan tales in the Middle Ages of Japan. Chapter 4 begins by presenting the Buddhist view of women in courtesan tales in the Middle Ages of Japan, and then lays out the development of this view based on the history of Buddhism in the Heian period and the Kamakura period.

From the above chapters, courtesans can be idealized by describing them as famous female poets or the personification of Buddha. This idealization aims at Buddhist preaching to women. Courtesans realize the value of self-existence through literary works. These women are important to Buddhism and men. It is clear that courtesans are indispensable at that time. The meanings of these legends are composed of three points: first, an observation of ideal images of courtesans in the Middle Ages of Japan; second, an observation of preaching methods of Buddhism in Medieval civil society; third, an observation of the idealization which gives hope of afterlife to women who take the contempt of women for granted.

Keywords: The images of courtesans, Ono no Komachi(小野小町), Izumi Shikibu(和泉式部), nyoninkyūsai(女人救済), nyoninzaigōkan(女人罪業観)

目次

要旨 …… i

摘要 …… ii

Abstract …… iii

目次 …… iv

序論

第一節　研究動機と目的 …… 1

第二節　先行研究の歴史

一　史料研究について …… 3

二　中世仏教説話における遊女像について …… 6

第三節　研究内容と方法 …… 10

第一章　小野小町伝説における遊女像

はじめに …… 11

第一節　伝説の中の小野小町 …… 11

第二節　「色好み」について

一　千人の男に逢う …… 15

二　和歌の徳 …… 16

第三節　観音菩薩の変化について

一　遊女成仏譚 …… 18

二　観音変化譚 …… 19

おわりに …… 22

第二章　和泉式部伝説における遊女像

はじめに …… 23

第一節　伝説の中の和泉式部 …… 23

第二節　遊女気質について
一　五条と遊女 …… 26
二　やさしき遊女 …… 27
三　美人としての因果 …… 29
第三節　往生及び遁世について
一　和歌の徳 …… 31
二　謡曲「東北」 …… 35
三　遁世譚の定着 …… 36
おわりに …… 37

第三章　遊女説話の前提（１）
―仏典における女人罪業観と救済思想―
はじめに …… 38
第一節　法華経と女性 …… 38
第二節　菩薩と女性 …… 42
小括 …… 45

第四章　遊女説話の前提（２）
―平安・鎌倉時代の女人罪業観と救済思想―
はじめに …… 46
第一節　物語における女人罪業 …… 46
第二節　物語における観音変化思想
一　歌舞の菩薩 …… 51
二　生身の普賢菩薩 …… 53
三　如意輪観音変成玉女事 …… 54
四　小括 …… 55
第三節　浄瑠璃物語における仏教思想
一　浄瑠璃物語における即身成仏思想 …… 55
二　浄瑠璃物語に見られる観音信仰 …… 58
おわりにかえて――女人罪業思想の形成と受容について …… 58

結論 …… 60

參考文獻 …… 68

謝辭 …… 76

國立政治大學 National Chengchi University

序論

第一節　研究動機と目的

かつて日本文化にかかわる主張として「日本は農本主義である」、「日本文化の基礎は稲や稲作農民にある」という「常識」があった。しかし、その常識はある歴史家の登場によって大いに否定されることとなった。その人物とは、中世史家の網野善彦氏のことである。彼は既に農民史・社会経済史が全盛の1970年代に、領主と農民との関係を中心に描く、硬直化してしまっていたマルクス主義的な歴史像を批判し、これまで重視されてこなかった山野河海で活躍する非農業民や職能民に注目し、社会を支える人々の総体として社会の歴史を描くよう提言したことで知られる。彼のこの主張は、ヨーロッパのアナール学派を日本に紹介した阿部謹也氏の言説と絡むことで、学界および論壇に、社会史ブームという一大センセーショナルを巻き起こした。

網野氏の登場を契機として、社会経済史から社会史へと大きくスタイルを変化させた歴史学会では、非農業民が学問研究の対象として認められるようになり、民俗学や考古学との共同作業を通じて、様々な成果が積み重ねられた。本研究が対象とする遊女に関する研究も、都市史研究や女性史研究の隆盛とあいまって、その存在形態に関する議論が盛んに行われるようになった。

この遊女研究は、網野氏の提言以前にも既に滝川政次郎氏らの業績があり、それ以後も大和岩雄氏、後藤紀彦氏、脇田晴子氏等によって、精力的に研究が進められた。これまで近世遊女の前史として語られるに過ぎなかった古代・中世の遊女について様々な角度から考察がなされ､新たな解釈や発見が相次いだ。具体的には、網野善彦の「遊女・白拍子は宮廷に属する職能民」説や網野―脇田の「卑賤視時期」論争に決着をつけようとした豊永聡美氏の見解などがあげられる。その内容に関する詳細は後の節の先行研究に譲りたい。なお、遊女研究の現時点におけるもっとも新しい成果は、恐らく服藤早苗氏の『古代・中世の芸能と買売春』と思われる。[1]

[1] 筆者が本論文を執筆する間に出版された遊女研究における最新成果は恐らく2012年9月30

しかし、研究が深化する過程で、見解の一致をみない大きな課題も残された。例えば遊女の起源については、中山太郎氏・柳田國男氏の「巫女起源説」[2] に対して、滝川政次郎氏が「外来民族起源説」[3] を主張し、また、遊女の身分について滝川・脇田両氏が「法外の民」[4] や「化外の民」[5] と位置づけるのに対して、網野・後藤両氏が「職人」身分[6] と説いていることがあげられる。さらに当時の遊女などの命名についても議論があり、仏教起源説をとる柳田氏[7] ・中山氏[8] ・沖浦和光氏[9] に対し、滝川氏が「中国宋代の名妓の真似」[10] とする見解を発表していることも未だに解きがたい課題として残されている。

日に出版された服藤早苗氏の著書『古代・中世の芸能と買売春――遊行女婦から傾城へ』（明石書店、2012 年）である。

[2] 中山太郎氏は「我國の性的職業婦人の起原は、神寵の衰へたる巫女、又は神戒に叛きたる巫女によって発生したものである。私の所謂「巫娼」なるものは、これを意味してゐるのである。（中略）その神社の近くに遊廓を有してゐることは、古き巫娼の存在を想はせるものである。従って是等の巫娼から出た我國の遊女が、古く流れの身と言われていながらも、猶ほ立烏帽子を着け、皷を持ち、更に太夫と称して、歌舞にまで関係してゐたのである」と論じている。中山太郎『日本巫女史』（八木書店、一九七四年復刻第二刷、33-34 頁）を参照。一方、柳田國男氏は遊行女婦について、「社會學の研究者などは、屢々昔の巫女の娼女であったことを説きますが、實はそれでは言ひ様が悪いので、寧ろ遊女がもと巫女の一種であったのです」と論じている。柳田國男『定本柳田國男集第八巻』（筑摩書房、一九六二年、355 頁）を参照。

[3] 滝川政次郎氏は朝鮮の白丁民と傀儡子族の漂泊性・信仰の一致や芸能・生業の類似することから「傀儡子族は白丁民の遺蘗ではあるまいか」と推断を下した。滝川政次郎『遊女の歴史』（至文堂、一九六五年、23-31 頁）を参照。

[4] 滝川氏は『傀儡子記』の内容「不耕一畝田、不採一枝桑、故不屬縣官、皆非土民、自限浪人、上不知王公、傍不怕牧宰、以無課役、為一生之樂」を採り、法律上の身分を持たない所謂法外の民と考えている。さらに氏は、遊女クグツは編戸の民ではないから、良民でも賤民でもないが、唐令においては賤民である妓女即ち遊女クグツに対して、唐令を母法として律令法を制定した日本社会では高い地位を認めるはずはない、と考えている。滝川政次郎『遊行女婦・遊女・傀儡女』（至文堂、一九六五年、71-73 頁）を参照。

[5] 脇田晴子氏も滝川氏と同じく『傀儡子記』の「不耕一畝田、不採一枝桑、故不屬縣官、皆非土民、自限浪人、上不知王公、傍不怕牧宰、以無課役、為一生之樂」を採り、「王化に浴びしない民すなわち「化外の民」であり、保護もない代わりに納税義務もない。世の身分外の身分ということができよう」と論じている。脇田晴子『女性芸能の源流：傀儡子・曲舞・白拍子』（角川書店、二〇〇一年、87 頁）を参照。

[6] 網野善彦氏は後藤紀彦氏の研究から「遊女・白拍子は「公庭之所属」と言われ、平安時代後期にはすでに内教坊と推定される官司の統轄下にあり、傀儡子にしても同様の方向で考えうるので、やはり「法外」の存在とは言い難い」と後藤氏の論点を賛同している。網野善彦『中世の非人と遊女』（講談社学術文庫、二〇〇五年、152 頁）を参照。なお、後藤氏の研究については、網野善彦・後藤紀彦共同編集『週刊朝日百科 3　日本の歴史　中世Ⅰ－③遊女・傀儡・白拍子』(朝日新聞社、二〇〇二年)4-81、4-82 頁に詳しい。

[7] 柳田國男氏は王朝時代の名妓の名を多く蒐集した相場長昭の「遊女考」を言及し、その中には「観音小観音文珠御前孔雀など仏教に因める名称多し」と指摘した。柳田國男『定本柳田國男集第四巻』（筑摩書房、一九六三年、489 頁）を参照。

[8] 中山太郎氏は、当時の遊女の名前が普賢・観音・勢至という仏名をしたことは、売笑をもって菩薩行の一つと信じた民間信仰の現れであったと考えている。中山太郎『売笑三千年史』（パルトス社、一九八四年、181-182 頁）を参照。

[9] 『遊女記』に記された十八人の遊女の名は神仏にゆかりのある名を付けていて、つまり神仏

このように、研究者の立場、史料の解釈の違いによって、様々な主張・意見が見られるように、今、遊女研究は盛んであり、新たに研究する余地がないほどに議論が出尽くした感がある。そこで、本論文では、これまでの研究とは異なる視点、即ち仏教思想の観点から中世の遊女像を探究したいと思う。検討対象となるのは、平安時代末期から室町時代にかけて成立した、とりわけ小野小町と和泉式部を遊女にとする文芸作品『玉造小町子壮衰書』・『和歌知顕集』・『冷泉家流伊勢物語抄』・謡曲『卒都婆小町』・『小町草紙』・『和泉式部』・『一乗拾玉抄』・『琴腹』、そして赤木文庫蔵『浄瑠璃物語』十二段目などである。これら作品に見られる仏教思想を通じて、中世の遊女像の一面を提示したい。

第二節　先行研究

一　史料研究について

まず、中世の遊女をめぐる研究史を整理する。ここでは、遊女の起源と実態をめぐる研究にしぼって見ていきたい。

中世の遊女を語る上で避けて通れないのが、平安時代後期成立した大江匡房の『遊女記』『傀儡子記』である。これらは遊女研究の第一級史料と見做され、後世に決定的な影響を与えた。

また、鈴木登氏の「平安朝に於ける遊女の研究」は遊女研究の先駆的論文である。ここで氏は遊女という名称の起源について次のように整理している。一、歌を唄い、楽を奏で舞を踊り、遊興の相手をした女であるから遊女という説。二、『萬葉集』の「遊行女婦」を略したものであるとの説。三、中国の『詩経』

の化身で霊妙な神通力のあることを名にほのめかしていたと沖浦和光氏が考えている。沖浦和光『「悪所」の民俗誌――色町・芝居町のトポロジー』（文藝春秋、二〇〇六年、79 頁）を参照。

[10] 滝川氏は中国・唐の文物制度を導入した奈良・平安時代には当然、遊女の制をも唐に模倣し、また、遊女は唐・宋を慕いてその妓女の流行りに倣ったと考えた。例えば「観音」は宋の名妓「賽観音」の名を採って己の名としたものである。滝川政次郎『遊女の歴史』33-34 頁を参照。

に「漢有游女」の語を取って、水辺を遊行し売色する女を指して遊女と呼ぶとする説をあげる。[11]

その後、半世紀を過ぎて、遊女起源をめぐる議論は活況を呈するようになる。まず、滝川氏・脇田氏は『傀儡子記』から、遊女や傀儡子を朝廷による統制を受けない「法外の民」または「化外の民」として把握し、また、脇田氏は遊女が鎌倉時代以前から卑賤視され始めたとする。[12] これに対して、網野・後藤両氏は平安時代末期から鎌倉時代にかけて、遊女や白拍子を母に持つ貴族が数多く存在することなどから、遊女らは決して卑賤視されていなかったと真っ向から反対する説をとなえている。また彼らは、遊女が宮廷の女官を起源とし、朝廷に属する身分であったとも主張しており、朝廷による統制を受けないとする滝川・脇田説を批判している。[13]

遊女の実態については、滝川氏などによる『遊女記』と『傀儡子記』の比較検討から、遊女が、傀儡子と芸能の内容を多少異にするとともに、陸を主体とする傀儡子に対して、水上を主な活動の場所とすることが明らかにされている。だが、その後、徐々にその芸能や形態における違いがなくなり、ついに江口・神崎のあそび者を遊女と呼び、それ以外の諸国のあそび者を傀儡子と呼ぶに至ったという。そして、鎌倉時代中期以降、江口・神崎の賑わいが衰え始め、代わって京都と鎌倉を結ぶ東海道の宿駅が賑わうようになり、傀儡子が遊君と呼ばれるようになったと述べている。[14]

遊女の組織などの存在形態について、西国だけでなく東国のあり方についても詳しく検討したのが豊永聡美氏の「中世における遊女の長者について」であ

---

[11] 鈴木登「平安朝に於ける遊女の研究」（一）・（二）・（三）（『社会史研究第九巻三・四・五号』所収、日本学術普及会、一九二三年）。しかしながら、游女とは漢水の女神という見解もある（袁愈嫈・唐莫堯訳『詩経』上（台北市：台湾古籍出版、一九九六年）20-22 頁を参照）。

[12] 脇田氏の見解は、傀儡子・遊女は鎌倉時代末期から南北朝、所謂天皇・宮廷の力が弱まった時点から卑賤視が強化されたと考えるものである。よって、前期に卑賤視がなかったというものではない。このことは、「給田を与えられたり、天皇・貴族の子を産んだからといって、卑賤視がないことにはならない。ただ、子が親王・内親王になっているのは卑賤視が弱いといえるだろう」との見解から明らかである。脇田晴子『日本中世女性史の研究―性別役割分担と母性・家政・性愛―』（東京大学出版会、一九九二年、68-69 頁）を参照。

[13] 網野氏は「少なくとも鎌倉時代までは遊女・傀儡・白拍子は化外の民でもなく、また後代のように卑賤視の対象でもなかった」と述べ、彼女等を供御人や神人と同じ立場の者と位置付けている。網野善彦・後藤紀彦共同編集『週刊朝日百科 3　日本の歴史　中世Ⅰ－③遊女・傀儡・白拍子』4-71 頁を参照。

[14] 滝川政次郎『遊行女婦・遊女・傀儡女』25 頁を参照。

る。遊女の組織については、『遊女記』から、そこに記述された「宗」「祖」の意味から、遊女集団には長者がおり、単にその集団の頭であるというだけでなく、その土地の祭祀を司る者でもあったことを想定している。また、氏は『海道記』の検討から「足柄」という今様が美濃・青墓の遊女により広められたことを指摘し、交通上の要所において活動する遊女が都と地方の文化交流の一翼を担ったと論じた。[15] さらに豊永氏は網野―脇田氏の論争について、遊女とはいえ、ランクの差によって生活形態や待遇も変わっていくとし、大江匡房の記述には誇張があるかもしれないが、そこには最下級の者が含まれていると考え、網野・後藤両氏が対象とした人々を遊女の内でも上位者であるという結論を下した。[16]

しかしながら、網野氏はこの見解に対して「史料に現れない遊女等を想定することは、問題を不可知の世界に導いてしまう結果になるのではなかろうか」[17]と反論している。確かに史料に記されていないことを推測で述べるのは、実証性に乏しいとの批判を受けるのかもしれないが、豊永氏の見解に可能性が全くないとは言い切れまい。

実際、小谷野敦氏は豊永氏の見解を支持し、「平安後期から史料上でも東海道の宿駅に現れている傀儡または遊女の類は、地理的に言ってもそのすべてが宮廷に関与していたとは考えにくく、やはり豊永が論じるように、その土地の勢力者に結びついていたと見るべきだし、遊女にも階層があったと考えるのが最も自然である」[18] と述べている。

---

[15] 豊永聡美「中世における遊女の長者について」（『中世日本の諸相』下巻所収、吉川弘文館、一九八九年、406-407 頁）を参照。

[16] これに該当する豊永氏の見解を次に引用しておく。「一様ではない遊女や傀儡の何れの階層を対象とするかによって生じているのではないかと考えられるのである。すなわち一口に遊女といっても、上は天皇の寵愛を受ける者から、下はその日暮しの者まで様々な階層が存在したのである。『傀儡子記』『遊女記』に見られる記述は網野氏が言うように大江匡房による誇張があるかもしれないが、そこには最下級の者を含んだ遊女や傀儡の一般形態が述べられていると思う。それに対して網野氏や後藤氏が挙げられた例は、あそび者の中でもいわば上ランクに位置する長者的存在の遊女や傀儡に関するものであったと思われる。ただし今日、史料となって歴史上に現れる遊女たちは、そのほとんどが上ランクの者であり、中世社会との密接な結びつきを明らかにし得るのも彼女たちなのである」。豊永聡美「中世における遊女の長者について」406 頁を参照。

[17] 網野善彦『中世の非人と遊女』233 頁。

[18] 小谷野敦「「聖なる性」の再検討」（『日本研究』第 29 集所収、国際日本文化研究センター、二〇〇四年）307 頁。

豊永氏の研究以降、さらに詳細な遊女の実態に関する研究が続いていくことになるが、これら個々の研究については、本論で必要な限り検討していくことにする。

二　中世仏教説話における遊女像について

これまでの遊女研究において、仏教説話とのかかわりから遊女を位置づけようとする研究が少なからずある。本論もこの仏教説話とのかかわりから中世遊女像について検討していきたい。この説話の中で、遊女として位置づけられている史上高名な女性としては、小野小町・和泉式部があげられる。本論では両者を通じて中世遊女像の実態に迫りたいと思う。

まず、この分野での主な業績を概観してみよう。

佐伯順子氏は『遊女の文化史』にて、和泉式部の多情性によって性の神の神性を象徴していると言い、また大島建彦氏も和泉式部の伝承が遊行巫女の伝承らしいと推定することを述べている。そして『和泉式部』に母子相姦は伝説の世界では「聖なる婚姻（ヒエロス・ガモス）」[19] に他ならないとし、式部が後に出家した件は、近親相姦を悪とみなすより後代の精神世界が表層にかぶさったものと推測している。[20] 氏は、小野小町だけでなく、衣通姫の性格も美貌と和歌の才に特徴づけられていた衣通姫の性格も含め、色好みであることが伝承世界で性の神のシンボルとなり得たとし、色好みは聖なる性の実践であると説く。そして、小町が最終的に観音菩薩の化身とされたのは、歌と色好みへの信仰に基づく神格化の現れであるという。[21]

大和岩雄氏は著作『遊女と天皇』にて、衣通姫を神妻としての一夜妻を説き、彼女の流れを受け継いた小町、それと彼女の後身と見做される遊女は言うまでもなく一夜妻であると主張する。『小町草紙』に色好みの遊女小町が観音の化身と記されているのは、一夜妻のイメージを重ねたからであり、当時の神仏習合思想によって観音とされたからであるという。小町の原像は猿女君の祖の天

---

[19] 聖なる婚姻は神婚、聖婚ともいう。男神と女神、神または神性を有する者と人間との結婚である。（『日本国語大辞典』第二版・第七巻、小学館、二〇〇一年）594 頁を参照。
[20] 佐伯順子『遊女の文化史』（中央公論新社、一九八七年）66-68 頁。
[21] 佐伯順子『遊女の文化史』81 頁を参照。

鈿女命に求められるという。一方、『和泉式部』に式部の母子相姦譚のような異常な性交譚は、蛇や動物などの異類婚譚と同じジャンルに属し、神婚譚の流れに入ると論じる。[22]

佐々木孝二氏は「御伽草子「小町草紙」論」にて、小町の懺悔譚はこの語りの主題であると言い、人々を導くために観音が小町、業平に身を借り、この世に現れ、人の世の苦悩を自らも体験するという構想は中世の典型的視点の一つである唱導の語りに他ならないと指摘した。[23] さらに物語の冒頭について、中世の人は当時の宮廷の女房たちの生活実態を知らず、日頃華美な服を着て遊宴に侍りや王公貴族と浮き名を流すといった生活が遊女の生活形態と重なる部分があるので、「内裏に色好みの遊女あり」[24] という架空のイメージが生まれたと解釈している。最後に語り手についての人間像を色好みの歌人の成れの果てを思わせる女性で、諸国を巡り歩き、神仏の霊験や信仰を唱導する巫祝と想定している。[25]

今関敏子氏は『〈色好み〉の系譜――女たちのゆくえ』にて、遊女としての小町像が形成され、定着していく過程で、大きな役割を果たしているのは、『伊勢物語』であると推測する。[26] 『伊勢物語』に『古今和歌集』に収録される小町の歌を「色好みなる女」が男に贈答する事例が見えるからである。さらに小町と和泉式部を対比し、小町が男を待つ身となりながら、その結果を拒む自ら行動する「拒む女」と類型し、この女のタイプは結果的に落魄していくとし、一方、小町と全く逆に「受容する女」として捉えた和泉式部が最終的に女人往生に結びつくと推測する。そして、和泉式部が遊女と重なっていく過程は小町以上に男たちにとって望ましい変化であったと指摘している。[27]

柴佳世乃氏は「『和泉式部』――室町期における物語の広がり――」にて、先に「五条」は「遊女」と深く結びついた場であることを提示し、これが和泉式部の説話に持ち込まれ、彼女の遊女像をより鮮明に浮かび上がらせる効果が

---

[22] 大和岩雄『遊女と天皇』（白水社、一九九三年、294-302 頁）を参照。
[23] 佐々木孝二「御伽草子「小町草紙」論」（『国文学解釈と鑑賞』60 巻 8 号所収、至文堂、一九九五年）60 頁。
[24] 『小町草紙』（大島建彦訳注『御伽草子集』所収、小学館、一九九二年）110 頁。
[25] 佐々木孝二「御伽草子「小町草紙」論」63-65 頁。
[26] 今関敏子『〈色好み〉の系譜――女たちのゆくえ』（世界思想社、一九九六年）17 頁。
[27] 今関敏子『〈色好み〉の系譜――女たちのゆくえ』77 頁を参照。

あったとする。そして最後に「くらきより」の歌で物語に終止符を打つことで和泉式部を語る際に不可欠な好色・歌徳・仏教の三要素を見いだすことができると論じた。[28]

濱中修氏は「『小野小町』――乞食と菩薩――」にて、細川涼一氏曰く、男性優位社会に於ける根強い女性蔑視の影響という論点に賛同する。[29] また、氏は「落魄」と「観音」という両極端な小町像を併記されている点については、その乞食・非人としての姿は、むしろ彼女の菩薩としての聖性を保障する苦行の姿として捉えられると述べ、賤形もまた苦行の一形式で、それによって聖性は保障されている、という見方を提示している。[30] さらに同氏は、「御伽草子『和泉式部』『小式部』論」にて、中世の和泉式部伝説の二大要素は歌才と好色にあると指摘した。[31] さらに『小野小町』と『和泉式部』両者は共に好色女性の零落譚として位置づけられると論じ、『和泉式部』の意図は、女性を賤視することでなく、そのような賤視さるべき女性でも救済の道はあることを示すことにあるとも論じた。[32] また同氏は『女神たちの中世物語』にて、『伊勢物語』の古注釈書『和歌知顕集』巻一において、小町を観音と見做すのは、末世においては正統的な方法で悟りへの道を説いても衆生の耳には入りにくいので、「二滞」の法によって菩提へ導くべく、業平と相談して如意輪観音が好色の美人に化したと述べ、小町菩薩説に関する思想的背景について論及している。私見によれば、この氏の見解と小町以外の遊女菩薩説との間には相違点も見られるのだが、遊女説話の女性に仏性を見る視点は中世の信仰と文学領域において普遍的に見られたことは確かであり、氏の指摘には大いに学ぶべきところがあろう。[33] 濱中氏の論文からも窺われる通り、中世においては小野小町や和泉式部のような歴史上に有名な女性の名を借り、女人救済をテーマとする物語が多く作り上げられたが、その中でも『和歌知顕集』における小町菩薩説には「む

---

[28] 柴佳世乃「『和泉式部』――室町期における物語の広がり――」（『国文学解釈と鑑賞』61巻5号所収、至文堂、一九九六年、55頁）を参照。
[29] 濱中修「『小町草子』――乞食と菩薩――」（『国文学解釈と鑑賞』61巻5号所収、至文堂、一九九六年）57頁。
[30] 濱中修「『小町草子』――乞食と菩薩――」60頁。
[31] 濱中修「御伽草子『和泉式部』『小式部』論」（『国文学解釈と鑑賞』60巻8号所収、至文堂、一九九五年）120頁。
[32] 濱中修「御伽草子『和泉式部』『小式部』論」123頁。
[33] 濱中修『女神たちの中世物語』（新典社、二〇一一年）84、91頁。

しろ色好みこそ」即身成仏になるような発想があった。よく見られる女人罪業思想による念仏往生類型と異なり、少し奇抜な説ではあるが、遊女菩薩化身説に斬新な視点を提示していると思われる。管見の限り、石川透「注釈書・教説の中の小野小町」・小峯和明「中世説話の小町」にも『和歌知顕集』中の小町説話について言及があるが、猟師と結婚及び小町の観音化身の話に触れるに止めており、[34] 濱中氏の提起したような議論にはなっていない。

崔恵珍氏は『和泉式部・小野小町の人物像の比較研究：平安歌人から中世遊女までの人物像変遷について』にて、まず小町像については、平安時代に成立した『玉造小町子壮衰書』が小町像の定型を作り、これを受け継いだ中世前期の『伊勢物語抄』を契機とし、中世後期に入ってから様々な伝説が生まれ、多様な小町像が『謡曲』に見られるようになったと論じた。[35] 小町が零落れていくことについては、「恐らく男がかつて人生で最高の美の対象として、夢を見、神まで通ういみじさに憧れた女の最も純粋な変化しない考えに対する憎しみであろうか」[36] と推測している。和泉式部像については、「和泉式部像の再検討―中世後期に変化する和泉式部像の一考察―」にて、和泉式部が恋愛遍歴を重ね、宮廷の女房として豊かな知性があったために、遊女とイメージされ、仏教説話に頻繁に登場したのではないかとみている。また、歌人和泉式部が遊女へ変化したのは、字を知って知識を持っているところに遊女と宮廷の女房と共通性があったために、結びついたのではないかと推測している。[37]

これら研究史を振り返ってイメージできることは、小野小町が神仏の化身とされ、衆生を引導する者としての描写が多く見られるのに対し、和泉式部は女人救済のモデルとされる場合が多く見られるということである。このことから、同じく遊女とされた二人が、それぞれ異なる役割を担っていたように考えられる。それは言い換えれば、遊女像に二つの要素があることを示していよう。それでは遊女像にどうしてこのような要素が見られることになったのだろうか。

---

[34] 石川透「注釈書・教説の中の小野小町」75-77 頁、及び小峯和明「中世説話の小町」50 頁（以上、『国文学解釈と鑑賞』60 巻 8 号所収、至文堂、一九九五年）。

[35] 崔恵珍『和泉式部・小野小町の人物像の比較研究：平安歌人から中世遊女までの人物像変遷について』（大谷大学大学院研究科仏教文化専攻博士論文、二〇〇六年、94-95 頁）を参照。

[36] 崔恵珍『和泉式部・小野小町の人物像の比較研究：平安歌人から中世遊女までの人物像変遷について』96 頁。

[37] 崔恵珍「和泉式部像の再検討――中世後期に変化する和泉式部像の一考察――」（『文藝論叢』第六十五号所収、大谷大学文芸学会、二〇〇五年）25 頁。

このことを改めて問題としなければならないであろう。

第三節　研究内容と方法

本論はまず、中世に成立された小野小町及び和泉式部二人にまつわる数々の物語の中でとりわけ「遊女」として描写されるものを取り上げ、その遊女像について検討する。そのために、前の二章にて、二人が遊女として扱われた物語から遊女としての性格を明らかにし、これを通じて中世の遊女像一般についても論及したい。また、二人の遊女としての性格と仏教説話との関連について論じ、これらの説話を通して当時の遊女がどのように見られていたのか、またはどういう風に認識されていたのかについても検討したい。次に二人にまつわる数々の伝説に見られる仏教の女性観、とりわけ女人罪業観と救済思想について検討したい。まず、『法華経』に代表される仏典における女性観や遊女観音変化譚の下地と思われる菩薩と女性との関係について、基礎的な確認作業を行う。さらに、これらを日本で受容したと思われる平安・鎌倉時代の仏教史における女性観について整理し、この女性観がいかに中世遊女像の前提となっているかを議論したい。

國立政治大學 National Chengchi University

第一章　　小野小町伝説における遊女像

はじめに

六歌仙として名を馳せた小野小町は、古代末・中世を通じて、歌物語における歌人としてだけでなく、様々な説話において恋多き好色女として、さらには遊女としても描かれるようになる。

本章は、諸先学の研究を参考にし、かかる小野小町の伝説から遊女像の生成及び当時の人々の遊女観について検討するものである。

第一節　伝説の中の小野小町

小野小町にまつわる伝説は少なくない。その理由について前田善子氏は伝記が未伝であること、美人であること、及び優れた歌人であり、一生を不幸のうちに終わったと推定されるという四点にまとめた。ゆえに後人の興味を引き、数々の伝説が生まれたと考えられている。前田氏はさらに小町の伝説を美人流浪伝説、美人驕慢伝説、美人好色伝説、歌人伝説の四種類に分類している。[1] 前田氏のこの分類は、現在でも小町説話を整理する際の基準となっていると思われる。本章では、小町と遊女との関連性を示す史料、美人好色伝説、特に小町遊女伝説にかかわる物語に検討の範囲を限定し、これまでの諸先学の研究を検討した上で、自身の研究の方向性を示しておきたい。

それではまず、遊女としての小町像の具体相を把握しておきたい。次の諸史料（抜粋）は遊女小町像に関する代表的なものである。

① 女答予曰。吾是倡家之子。良室之女焉。壯時憍慢最甚。衰日愁歎猶深。齢未及二八之員。名殆兼三千之列。被寵華帳之裏。不歩外戸。被愛珠簾之内。無行傍門。（傍線筆者、以下同じ）

[1] 前田善子『小野小町』（三省堂、一九四三年）221 頁。

（平安時代後期・『玉造小町子壮衰書』）

② かの業平は馬頭観音としてこの事をあんし給しに、小野小町は如意輪観音としてともに議し給て、かれはたわれおとなり、これはたはれめとなりて、おなし世にいて給し人也。されは、こうしゆひゝくといへとも、たゝかされはこゑをなさすとて、男よにこゑて色ありとおもへとも、女さためすは信しかたし。女いろあまりとも、男ほめすはあらわれかたきか故に、かれこれむまれあひて、たかひに、しなをさため、とくをほめたる女なれは、これをかきたる也。

（鎌倉時代・『和歌知顕集』）

③ 『宇治殿の物語』には、小町は馬頭観音の化身也。井出寺して死と云う事、一旦の説なれとも、其後衰幣して相坂の辺にて骸をさらすとみへたり。されは、井出寺にて死とはなかりと云り。

（鎌倉時代・『冷泉家流伊勢物語抄』）

④ いたはしやな小町は、さも古は遊女にて、花の貌輝き、桂の黛青うして、白粉を絶えさず、羅綾の衣多うして、桂殿の間に余りしぞかし。

（室町時代・謡曲『卒都婆小町』）

⑤ そもそも、清和の頃、内裏に、小町といふ、色好みの遊女あり。……この小町は、歌を詠むことすぐれたり。古の衣通姫の流れとも申し、観音の化身とも申し、かりにこの世に生れ給ひて、うあく、むあく、衆生の迷ひ深き、女人あまりに心もなきものの、あはれをも知らず、仏をも礼せず、神を拝まずして、いたづらに月日を送り給ふことを悲しび、色好みの遊女と生れ、（後略）

また、小町は、男に逢ふこと、まづ千人と記したれども、逢うて逢はぬとも見えたり。かたちのよきこと、李夫人、衣通姫にも異らず、見る者聞く者、これをしのぶこと、筑波嶺のこの面の茂きこと數を知らずして

國立政治大學 National Chengchi University

ありしことも、（後略）

「(在原業平）古の色好みの小野小町は、これにわたらせ給ふか」

「(小町）よくよく思へば、同じ色好みの、情けもことに在原の、おもかげは業平の、あら恥づかしいわが姿（後略）」

「(小町）その歌人の色にふけりしこと、数を白玉の、手に取る文の数あまたありしかども、身の果てしまでは、情の夫はなかりけり（後略）」

「(業平）われも心を移し、身を捨てて、色好みは、数を知らずあひ馴れしかども、その中にも、思ひとめしはわづかなり。(中略）みづからも、千人と記したり。これみな偽りの情なり。（後略）」

この物語を聞く人､まして読まん人は､すなはち観音の三十三体を造り、供養したるにも等しきなり｡小町は如意輪観音の化身なり｡また業平は、十一面観音の化身なり。あだにもこれを思ふべからず。南無大慈観音菩薩と、回向あるべし。

（室町時代・『小町草紙』）

最初の①「玉造小町子壮衰書」は平安時代後期に成立したといわれる。[2] 生没年が平安時代前期と推定される小町にとって、これは最初に彼女について記された作品と言えよう。この作品に登場する倡家之子とは倡女、つまり遊女のことを言う。この物語の主人公が小野小町とは明白に示していないが、彼女の物語として読み継がれている。従って、平安時代後期以降に小町を遊女視する傾向が生まれたと考えられる。この「玉造小町子壮衰書」以降、小町の遊女としてのイメージは強くなり、定着していくことは、室町期の史料から明らかで

[2] 細川涼一『女の中世　小野小町・巴・その他』(日本エディタースクール出版部、一九八九年）237 頁。また、渡辺秀夫「小野小町愛の地獄――「玉造小町子壮衰書」」(『国文学：解釈と教材の研究』28 巻 9 号所収、学灯社、一九八三年）84 頁。

ある。

次に②の『和歌知顕集』及び③の『冷泉家流伊勢物語抄』は『伊勢物語』の古注釈書である。『伊勢物語』を構成する多くの段において、登場人物は「男」「女」と記されているのみであるものの、これらを実在した人物に当てはめて解釈している。その内容は「今日から見れば、荒唐無稽としか言いようがないような付会が注釈の方法となっている」[3] とされるが、その分、注釈を施した当時の人々の男性像・女性像が反映されていると考えられる。ここでは②の巻第一「伊勢物語大事」の一部を、そして③の第六十三段の一部を抜粋して引用した。

④の『卒都婆小町』の内容については、乞食の老女と高野山の僧との宗教問答が行われ、そこで老女が、教化しようとした僧を言い負かしてしまうというエピソードが載せられている。僧に名を聞かれ、老女は小野小町の成れの果てと答えも、突然、彼女は深草の四位の少将の霊に憑かれ、狂い始める。やがて狂気を脱し、静かに後世を願うという内容である。本章に引用した箇所は、僧が目の前の老女が小町と知り、思わず嘆息をもらすシーンである。

最後の⑤『小町草紙』は、清和の頃に内裏に色好みの遊女小野小町がいて、若い時に栄華を極めたが、老後に落ちぶれ、ついに死に、在原業平の回向を受けるという物語である。本章に引用した箇所は、若い小町の美しい姿・性格を表しているところと、また、老後落ちぶれていて草庵に住む小町が業平に対する懺悔を申す場面、そして物語の最後にある読者に対する教訓の部分である。

本章では、これら史料から窺える遊女小町像の内、「色好み」譚と「観音菩薩変化」譚に注目する。それは両者が小町を遊女たらしめる最も重要な構成要素となっていると思われるからである。以下、まず「色好み」から述べてみよう。

[3] 片桐洋一・山本登朗編『伊勢物語古注釈大成』第一巻の「解題一『冷泉家流伊勢物語抄』とは何か」（笠間書院、二〇〇四年、276 頁）を参照。

第二節　「色好み」について

一　千人の男に逢う

「小町草紙」にある「内裏に色好みの遊女あり」について、佐々木孝二氏は「御伽草子「小町草紙」論」にて、中世の人は当時の宮廷の女房たちの生活実態を明確に把握ができず、日頃華美な服を着て遊宴に侍りや王公貴族と浮き名を流すといった生活が遊女の生活形態と重なる部分があるので、「内裏に色好みの遊女あり」という架空のイメージが生まれたと解釈している。[4]

今関敏子氏は「〈色好み〉の流浪」にて、「小町草紙」の「また小町は、男にあふこと、まづ、千人としるしたれども」の記載から、色好みについて、多くの相手と契る、剥き出しの欲望に従う放埒な性関係という意味であると論じる。

同じく松田修氏も「遊女百科・聖と俗のデュアリズム」にて、「逢うて逢はぬ」というような表現は逆説的レトリックで、日本性愛論の常套と論じる。つまり、小町は業平と同じく「千人」の相手と関係を持ったと位置づけられている。

それでは次に、これら諸先学の研究に対する私見を述べたい。

まず、佐々木氏の見解については、遊女をもと朝廷に属する職能民であるとする網野善彦・後藤紀彦両氏の説とのかかわりを指摘しておく。平安時代後期から鎌倉時代初期にかけての皇族であった守覚法親王（1150－1202）の著した『右記』の管絃音曲について述べた条に「倡家女・白拍子は皆な是れ公廷之所属也」[5] とある。記主の守覚法親王の父と言えば、今様狂いで知られる後白河天皇(1127-1192)である。後白河天皇は十歳から今様を習い始め、保元三年(1158)に退位して院となって、仁安四年（1169）に法住寺殿において出家し、法皇となり、五十歳の頃に『梁塵秘抄』を編纂したことは周知のことである。後白河院は三十一歳の時、今様の名人・傀儡女の乙前を参内させ、彼女が死ぬまで優遇したと言われる。このことを踏まえると「小町草紙」の時代設定たる清和の頃（在位 858－876）に、内裏に遊女がいることは想定可能であろう。しかしな

---

[4] 佐々木孝二「御伽草子「小町草紙」論」（『国文学解釈と鑑賞』60 巻 8 号所収、至文堂、一九九五年）63 頁。

[5] 大正新脩大蔵経刊行会編『大正新脩大蔵経』第七十八巻　続諸宗部九（大蔵出版、一九九二年）602 頁。

がら、このことを「小町草紙」の受容層が認知していたかどうかは検討の余地がある。

次に今関氏と松田氏の解釈について述べたい。両氏が「色好み」の意味を解くための史料は、「又小町は、男にあふこと、まづ、千人としるしたれども、逢うて逢はぬとも見えたり」の箇所である。この「逢うては逢わぬ」の意味について、私は「小町草紙」の別の部分を採って論拠にするほうが適切だと考える。物語中、小町が自らの住む草庵を訪ねてきた在原業平に対して、「よくよく思へば、同じ色好みの、情けもことに在原の、おもかげは業平の、(後略)」と自ら業平と同じく色好みと認めているが、この小町と同類とされた業平が、後に彼の「色好み」を懺悔に記述している箇所に注目したい。「われも心を移し、身を捨てて、色好みは、数を知らずあひ馴れしかども、その中にも、思ひとめしはわづかなり。(中略) みづからも、千人と記したり。これみな偽りの情なり」とあるのである。このことから、この「逢うて逢はぬ」とは、小町の側に引き寄せて考えてみれば、小町は多くの男と関係を持ったけれど、その多くは意に添わぬ多くの相手との行為であったという意味となる。ここからは、小町が自分の性欲や恋愛感情を満足させるために多くの男と関係を持ったのではなく、彼女を求めてくる男たちのために奉仕した、つまり自己犠牲を伴う利他行為を実践していたという解釈が可能となってこよう。

二　和歌の徳

もう一つ注目しておきたいのが小町の和歌の徳である。小町は和歌に優れ、六歌仙の一人として数えられていることは周知のことである。このことは、次に引用する『小町草紙』の一節から窺えよう。

> 日本の歌の道ほど、もてあそぶべきものはなし。万のことの葉となりにけり。歌の徳あまたあり。世の中の憂きにも辛きにも詠じ、神仏のたまふ偈にもなり、または、力を入れずして天地を動かし、目にも見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、たけき武士の心をも慰めぬるは歌なりとて、この小町は、歌を詠むことすぐれたり。

されば、歌をよく詠めば、仏を造り、供養し奉り申すと同じ。悪く詠めば、仏を造り損ざするとみえたり。

（『小町草紙』）

以上は、『古今和歌集』仮名序の引用である。和歌の素晴らしさを説き、和歌を通して男女の関係を睦まじくなることや良い歌を作れば、その功徳は仏像を造って供養することと同じであると述べられている。佐伯順子氏も『遊女の文化史』にて、上述の段落を引用し、男女の仲だちは歌の効用のうちの重要なひとつに数えられていると述べている。[6] なぜ和歌によって男女の仲が良くなるのかと言うと、古代には男女互いに和歌を贈答し、何回も掛け合いながら、対になり恋愛関係になる習慣があるからである。『小町草紙』に老女となった小町は「その歌人の色にふけりしこと、数を白玉の、手に取る文の数あまたありしかども、身の果てしまでは、情の夫はなかりけり」と、歌人としての自分は若き頃、数えられないほど多くの恋文をもらうことで好色に耽っていたといわれる。

これらのことから、色好みの女としてはただ単に美貌を有するだけでは不十分であり、これに加えて人を魅了する和歌を詠む才能がなければ恋を成就することができないと考えられていたことがわかる。ここに和歌と色好みとの密接な関係が窺える。

先ほどの二つの文には和歌と色好みとの関連性を示した他、仏教に関連する記載もあった。それは歌を上手く詠めば仏像を造って供養する功徳に相当することである。『和歌知顕集』にも、「文字三十一字に定し事、如来の三十二相になずらふるべし、そもそも、如来の三十二相の中に、無見頂相といふ相まします。凡眼しる事なし。かるがゆへに、あらはれては、三十一相也」[7] と書かれている。三十一文字の和歌の形式を仏教思想で説き、まさに歌道即ち仏道という考え方が表れている。中世においては、かかる言説が一定の説得力を持つものとして流布していたと思われる。

---

[6] 佐伯順子『遊女の文化史』（中央公論新社、一九八七年）73 頁。
[7] 片桐洋一・山本登朗編『伊勢物語古注釈大成　第二巻』（笠間書店、二〇〇五年）3 頁。

和歌を詠むに功徳があれば、和歌詠みが得意な小町に、実は功徳があることが暗示されていると思われる。ただし、『小町草紙』の冒頭で述べたように、小町は罪深い女のうえ、若い時神仏も礼拝せず、懺悔せずにして、老後に落魄の極みを味わなければならなくなる。

第三節　観音菩薩の変化について

先に掲載した史料には、小町を観音の化身とする一節があった。この観音変化の性格についての検討は第四章第二節に譲りたい。

ここでは第四章第二節での検討を準備する作業として、観音変化譚の形成過程との関連から検討を加えたい。

一　遊女成仏譚

まず、観音変化譚を検討する前に確認しておかなければならないのは、研究史においてあまり注目されてこなかったことだが、その前史として遊女成仏譚が先行して存在するということである。

「玉造小町子壮衰書」において小町が最後に仏道に帰依するとあるように、遊女に関する説話にも遊女と仏教の上人との対話を載せ、遊女が和泉式部の歌を歌って聖との結縁を願い、罪業深き身から救いを求めたとする物語(『発心集』)[8]や、法然上人の説法により室の遊女が仏門に帰依した（『法然上人行状絵図』[9]、『法然上人伝全集』[10]）という遊女教化（成仏）譚が少なからず見られる。

具体的に成仏譚の内容を述べておこう。『法然上人行状絵図』によると、建永二年（1207）三月十六日に法然が配流先の讃岐国へ向かう途中、室津の港で遊女が舟で追いかけてきて、「世をわたる道まちまちなり。いかなるつみありてか、かゝる身となり侍らむ。この罪業おもき身、いかにしてかのちの世たすかり候

[8] 大曽根章介・久保田淳編『鴨長明全集』（貴重本刊行会、二〇〇〇年）206 頁。
[9] 中村直美「遊女考――『法然上人行状絵図』・『和漢朗詠注』――」（『佛教大学大学院紀要』三六号所収、佛教大学、二〇〇八年）146-147 頁。
[10] 中井真孝「法然諸伝に見える遊女教化譚――『行状絵図』と『九巻伝』の前後関係――」（宮林昭彦教授古稀記念論文集『仏教思想の受容と展開』第一巻所収、山喜房佛書林、二〇〇四年）473-474 頁。

べき」と問いかけてきたという。これに対し、上人は「もはら念仏すべし。弥陀如来はさやうなる罪人のためにこそ､弘誓をもたてたまへる事にて侍れ｡たゞ、ふかく本願をたのみて、あへて卑下する事なかれ。本願をたのみて念仏せば、往生うたがいあるまじき」[11] と教えた。遊女は法然の言いつけを守り、近くの山里で只管念仏を称え、往生を遂げたという。

次に『発心集』「室の泊の遊君、鄭曲を吟じて上人に結縁する事」[12] によると、室の泊の遊女が舟を漕ぎ着け聖のもとへ向かい、和泉式部のかつて性空上人と結縁のため送った和歌「暗きより暗き道にぞ入ぬべき遥かに照らせ山の端の月」を歌って、結縁を願ったという話が載せられている。深い闇に迷い込んだ遊女が仏教の教えを月光に例え、その光こそ聖であると思い、浄土への回向を聖に託したのであろう。

そして『梁塵秘抄』の口伝集巻第十にも次のような一節が載せられている。

> 遊女のたぐひ、舟に乗りて波の上に浮かび、流れに棹をさし、着物をかざり、色をこのみて、人の愛念をこのみ、歌をうたひても、よく聞かれんと思ふにより、ほかに他念なくて、罪にしづみて、菩提の岸にいたらむことを知らず。それだに、一念の心おこしつれば、往生しにけり。[13]

以上の叙述には遊女を卑賤視にする考え方が見えてくるが、一方で遊女のような者でも仏に帰依すれば素懐を遂げることができるとする遊女成仏が説かれていたことが窺われよう。

二　観音変化譚

さて、このような成仏譚に混じり、観音変化譚が生じてくるわけであるが、その形成時期はいつ頃のことであったのか。このことについて、次の図表を参照してほしい。関係諸史料を成立年代順に並べてみると、遊女成仏譚よりも観

[11] 大橋俊雄校注『法然上人絵伝（下)』（岩波書店、二〇〇二年）116-117 頁。
[12] 大曽根章介・久保田淳編『鴨長明全集』206 頁。
[13] 臼田甚五郎・新間進一等訳注『神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集』（小学館、二〇〇六年）379 頁。

音変化譚が後発であることが改めて確認でき、さらにそれが鎌倉期以降であることが窺える。

書名	成立年代	性質
『梁塵秘抄』口伝集巻第十 遊女のような者は、一心に仏に帰依すれば、往生を遂げる	1180 年前後	成仏
『法然上人行状絵図』巻三十四第五段	建永二年（1207）3 月 16 日[14]	成仏
『発心集』巻六	1216 年以前[15]	成仏
『古事談』第三僧行　性空上人見生身普賢菩薩	1212－1215 年の間に	観音化身
『十訓抄』三ノ十五 性空上人と遊女	1252 年成立	観音化身
『撰集抄』巻三第三 室遊女遁世之事	1264－1275 年頃までに	観音化身

ただし、遊女ではないが女性が観音菩薩の変化であったとする物語は、すでに平安時代前期に成立した『日本霊異記』から知られるところである。その例として、次に二つ挙げておく。「孤の嬢女の、観音の銅像を憑り敬ひしときに、奇しき表を示して、現報を得し縁」[16]、そして「極めて窮れる女の、千手観音の像を憑み敬ひて、福分を願ひ、以て大富を得し縁」[17] がある。

西口順子氏の検証によると、菩薩が女性に化して人を救済する物語は遅くとも十二世紀にほぼ明確な形で存在したことが指摘されている。[18] 遊女の観音変

[14] 『法然上人行状絵図』の成立年代は徳治二年（1307）より 10 年かけて完成と推測されているが、ここでは法然上人が遊女を救う日付を示しておく。
[15] 『発心集』は鴨長明（1155-1216）晩年の編著とされるため、ここでは 1216 年以前と示しておく。
[16] 中田祝夫訳注『日本霊異記』（小学館、一九七五年）234 頁。
[17] 中田祝夫訳注『日本霊異記』251 頁。
[18] 西口順子「成仏説と女性――「女犯偈」まで――」（『日本女性史論集 5　女性と宗教』所収、吉川弘文館、一九九八年）338 頁。

化譚が女性のそれに比べて十三世紀成立と遅れて成立することについて、現在確たる論拠を示すことができないが、やはり、当時の遊女に対する卑賤視や罪悪の印象が強すぎて、遊女を観音菩薩の化身とすることに抵抗があったという事情を想定した方がよいかもしれない。観音変化譚に先行する遊女成仏譚が遊女観音変化譚を可能にするための下準備となった可能性もある。

また、遊女観音変化譚の形成に関して、見逃してならないのが、これに先行して、僧の相手をする女性が菩薩の変化であるとする物語が登場していることである。その具体例として、親鸞が建仁元年（1201）四月五日[19] の夜に京都・六角堂で救世菩薩(如意輪観音)の示現を蒙って得たとされる偈を次に示そう。

親鸞夢記云

六角堂救世大菩薩、示現顔容端政之僧形令服著白衲御袈裟端座広大白蓮告命善信曰

行者宿報設女犯

我成玉女身被犯

一生之間能荘厳

臨終引導生極楽

救世菩薩誦此文言、此文吾誓願、一切群生可説聞告命、因斯告命数千万有情令聞之覚夢悟了[20]

この中の偈は「女犯偈」と呼ばれ、偈の内容を簡単に示すと、修行者（僧）が前世の果報にして戒律を破り、女性と性的関係を持つことになっても、菩薩が高貴な女性（玉女）に化身して代わりをつとめ、僧を救済するという、観音変化譚が説かれている。

かかる僧の相手をする女性の観音変化譚も、遊女観音変化譚の形成に大きな影響を与えていると思われる。

---

[19] 『親鸞絵伝』西本願寺本は建仁元年（1201）とするが、その他の諸本は建仁三年（1203）と伝える。田中貴子「〈玉女〉の成立と限界」(『シリーズ女性と仏教 4　巫と女神』所収、平凡社、一九八九年、123 頁の注 1）を参照。

[20] 名畑崇「親鸞聖人の六角夢想の偈について」（真宗連合学会編『真宗研究』第八輯所収、百華苑、一九六三年、57 頁）を参照。

おわりに

本章では、遊女小町像を構成する「色好み」と「観音菩薩変化」について検討した。「色好み」については、「逢うて逢はぬ」の解釈を深めることで、相手を選ばず、求めてきた相手の要求に応じ、偽りの情で、愛を施すという遊女像を示すことができた。伝説の中で醜悪な老女として描かれている遊女小町は、千人とも言われる男たちの要求を満たしてきた者の姿であった。これを単なる悪女として評するわけにはいかないであろう。

この遊女小町像と遊女を観音菩薩の化身とする観音菩薩変化譚とは、お互いに響きあう関係にあるように思われる。多くの男たちのために身を犠牲にしてきた遊女小町と多くの人々を仏道へ導き救済する観音菩薩とはその形象が重なり合う。おそらく遊女小町像を受容した人々にとってもそれはある意味、想像可能な事柄だったのではないだろうか。

また本章では、この遊女観音変化譚に先行して遊女成仏譚があることも指摘した。そして、この成仏譚が先に受容されることで、すでに平安前期からみられた女性観音変化譚が遊女にも適用されるようになったのではないかと推測した。これはまだ検討を要する課題である。

國立政治大學 National Chengchi University

第二章　　和泉式部伝説における遊女像

はじめに

小町と同じく美人として知られ、多く物語を残しているのが平安時代中期の歌人・和泉式部である。謎の多い小町と異なり、『和泉式部日記』『和泉式部集』などを著し、歴史上実在した人物として知られているが、彼女が恋愛に対してかなり情熱的且つ奔放な姿勢をとっていたため、後世に遊女、歌舞の菩薩として描かれることになる。

本章では、和泉式部の伝説から遊女像の生成及び当時の遊女観について検討を試みたい。

第一節　伝説の中の和泉式部

和泉式部にまつわる説話の類は『日本古典文学大辞典』により、次のように整理されている。一、名歌の評論。二、歌による小式部との母子説話。三、阿闍梨道命との情事を語る説話。四、橘保昌の一子道命と遊女和泉式部との荒唐無稽な母子相姦譚。五、御法の教えを乞うて書写山の性空上人を尋ね「闇きより闇き道にぞ」の歌を贈る書写山参詣説話と一念発起の持戒清浄の尼僧説話。六、歌徳説話。七、田舎出身の和泉式部出世譚。八、式部の鹿の子伝説。[1]

この内、本章では、式部と遊女との関連性を示す史料、即ち三・四及び五に分類されている物語の一部を取り上げる。まず、遊女としての和泉式部像の具体相を把握しておきたい。次の諸史料（抜粋）は遊女像に関する代表的なものである。それは『和泉式部』・『一乗拾玉抄』・『琴腹』、そして赤木文庫『浄瑠璃物語』十二段目という四つの説話である。

[1] 吉田幸一執筆「和泉式部説話」条目（日本古典文学大辞典編集委員会編『日本古典文学大辞典』第一巻所収、岩波書店、一九八三年、140 頁）を参照。

① 中ごろ、花の都にて、一条の院の御時、和泉式部と申して、やさしき遊女あり、内裏に橘保昌とて、男あり。保昌は十九、和泉式部は十三と申すより、不思議の契りをこめ、情け深くして、十四と申す春の頃、若一人まうけ給ひ、あひの枕の睦言に、恥づかしとや思ひけん、五条の橋に捨てにけり。（傍線筆者、以下同じ）

（室町時代・『和泉式部』）

② 物語云。一乗院ノ時、泉式部トテ遊女アリ。書写ノ性空上人へ参リ、上人ニ奉値一、可成仏云テ参ルニ、上人、無シ御対面。式部、申様ハ、上人御対面無キハ、我等女人ナル故歟ト云テ、哥ヲ捧タル也。

冥キヨリ　冥キ　道ニツ入リヌヘキ　ハルカニ照セ　山ノハノ月

上人、難有ト思召ソ、御対面アリ　其時、式部、尋申様ハ、女人ノ即申成仏ハ、法花ニハ何ノ文テ候哉ト。上人、答テ云ク。無二亦無三也云云。式部、哥云。

無ク二無キ三ツ法リト聞ク時ハ五ツノ障リアラジトゾ思フ

（室町時代・『一乗拾玉抄：叡山文庫天海蔵』巻三「化城喩品」）

③ 和泉式部内にて此の由を伝へ聞き、深くこの事を羨み、道命法師伊勢より罷り帰る頃、野路の宿にて行き向かひ、はしたなき遊君のまねをもてなし、或る夜ほの暗きに、道命に逢ひて都の方に聞こゆる琴の歌、思しよりたる由なむ言ひて、「聞かまほしく」と申し合へりければ、「左右なく言ひ興がり侍るべきにや。都にて申し合ひて後こそ」とて、とりもあへず侍りしに、（後略）

（室町時代・『琴腹』）

④ おやをたすけん、ためならは、たかきいやしき、をしなへて、あいしやうくはんを、たつならは、おやも我身も、もろともに、そくしんしやうふつ、うたかひなしと、の給ひて、かきけすやうに、うせ給ふ

しきふ、此よしみるよりも、おやたにしやうふつ、したまはゝ、なにしに、このくはん、くるしかるへきと、きやうこくとのゝ、いとまこひ、みやこは、五てうに、やかたをたて、せん人に、ちきるへしと、たかふ

たかひてそ、たてられける

まことにひしんの、ことなれは、かねてより、心をつくす物ともか、三とせ三月に、九百九十九人まてこそ、まいりけれ

（室町時代・赤木文庫『浄瑠璃物語』十二段目）

まず、各引用文を収める各物語の概要を見ておこう。

最初に示した①の一節は、『御伽草子』の和歌説話『和泉式部』に収められているものである。引用した一節はその冒頭の部分にあたる。式部が十四歳の春に生み、五条の橋に捨てた子が、比叡山に上って出家し、道命阿闍梨とよばれた。彼は式部を生みの母と知らないで彼女に一目惚れし、柑子売を装って彼女に接近し、二人は一夜の契りを結んでしまう。翌朝、二人が親子であった事実を知った式部は身をあさましく思い、書写山に出家を遂げたという物語である。

次に引用した②の一節は明応二年（1493）に成立した法華経注釈書の最古とされる『一乗拾玉抄』巻三「化城喩品」から引用したものである。ここでも式部を遊女として描き、上人に女人成仏の方法を聞くという筋書きを有している。

続いて③は『琴腹』の一節を引用したものである。宮中にて鼠が琴の中に子を産むという凶事が発生する。これを幸いにするために宮中で和歌会が開かれることになる。歌人たちがなかなか良い和歌を詠めない中、道命が和歌を詠み出てきたと噂に聞いた和泉式部が、それを聞き出そうと、伊勢から都へ戻る道命を途中の野路の宿で遊君になりすまして、彼を待ち受けるという話である。引用した一節はこの部分に関するものである。

最後に④の一節は『浄瑠璃物語』から引用したものである。和泉式部は美人で、尚且つ多くの人の懸念を受けている故、亡くなった両親が成仏できず、増して式部死後にも地獄に落ちると両親から夢告された。式部は親の冥福を祈るために出家しようと決意したが、これを不憫に思う阿弥陀如来が老僧と化して、式部にやはり千人と契ることを勧める。その後、式部は都五条に舘を構え、千人に契る旨の高札を立て、千人と結ばれるのである。[2]

[2] 濱中修『女神たちの中世物語』（新典社、二〇一一年）95 頁の注 7 を参照。

第二節　遊女気質について

一　五条と遊女

先に提示した物語に二つの中に「五条」という地名が現れる。この「五条」と遊女には実は深いかかわりがある。

室町時代（凡そ明応九年（1500）頃）に成立された『七十一番職人歌合』には、「よひのまはえりあまさるゝたち君の五條わたりの月ひとりみる」[3] と詠まれ、付されたのが三十番「たち君」「つし君」の図が付されている。「たち君」の方は、「きよ水にていらせ給へ」とある武士に話をかける場面が描かれている。そのたち君の言う言葉は清水寺の近くにある寝所を指したものと思われる。そして彼女らが客を引く場所は清水寺の近くにある五条坂の辺りであることが画中の歌からわかる。[4]

『職人尽歌合』図[5]

[3] 網野善彦・後藤紀彦共同編集『週刊朝日百科 3　日本の歴史　中世Ⅰ－③遊女・傀儡・白拍子』（朝日新聞社、二〇〇二年）4-86 頁。
[4] 網野善彦・後藤紀彦共同編集『週刊朝日百科 3　日本の歴史　中世Ⅰ－③遊女・傀儡・白拍子』4-87 頁。
[5] 狩野晴川・狩野勝川『職人尽歌合』中巻（模本）、江戸時代、東京国立博物館蔵。出典：http://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0045417（最終閲覧時間：2013 年 6 月 15 日）

『看聞日記』応永二十九年（1422）正月十一日条にも「入夜松拍参。風流五條立傾城之躰学之」という記事がある。伏見宮貞成親王邸において伏見郷民が「五条立傾城之躰」に趣向をとった風流を付けて松拍を演じているほど、五条のあたりの路傍に立って客を引いて春を鬻ぎたち君の姿は著名であったことが指摘されている。[6]

以上の史料に基づき、改めて『和泉式部』に和泉式部が子を五条の橋に捨てること及び『浄瑠璃物語』十二段目に式部は千人と契るために五条に舘を建てる話を見てみると、物語に「五条」が出てくるのは和泉式部の遊女性を暗喩として強調するためであったと思われる。

ところで、『琴腹』には、五条の地名は出で来ないが、和泉式部が遊君を装い、道命法師を待ち受ける場所である野路の宿[7]という地名が出てくる。ここは、近江国（今滋賀県）にあり、遊女が多数在籍した宿であったことが知られている。[8] ここでも先の五条同様、和泉式部の遊女性が隠喩の形で強調されていることが窺える。

二　やさしき遊女

『和泉式部』における道命と和泉式部のやり取りに注目したい。柑子売に身を窶した道命阿闍梨は、式部の下女を通じて、銭二十一枚を恋の歌にのせて数えることを彼女に伝えた。その話を聞いて式部が、

> 小野小町は、若盛りの姿よきによりて、人に恋ひられて、その怨念とけざれば、無量の咎によりて、その因果のがれず、ついに小町、四位の少将思ひ離れず、
>
> **言ひ捨つる言の葉までも情けあるやただいたづらに朽ちはつる身を**
>
> といふ歌の心を忘れずして、つねに人にわりなき情をこめたきことにてと

[6] 網野善彦・後藤紀彦共同編集『週刊朝日百科 3　日本の歴史　中世Ⅰ－③遊女・傀儡・白拍子』4-86 頁を参照。

[7] 『日本歴史地名大系第 25 巻　滋賀県の地名』（平凡社、一九九一年）によると、野路宿は古代末から中世にかけて存在した中世東海道の宿である。しかし、中世後期になると、草津宿の繁栄によって衰退したと言われる。

[8] 小野恭靖「『琴腹』研究ノート」（『日本アジア言語文化研究』第六号所収、大阪教育大学日本・アジア言語文化学会、一九九九年）41 頁。

案じ続けて、下女一人連れて内裏を出て、道命が宿へ行きて、(後略)

(『和泉式部』)

美しい小野小町は男から恋い慕われたが､その気持ちに応えなかったゆえに、男から強い怨念を持たれ、はかりしれない罪を負い、その因果から逃れられなかった。和泉式部はこの小町の無念を歌にした彼女の気持ちを忘れず、いつも人に深い情けをかけたく思っていたので、下女を連れて道命のもとへ彼と一夜を過ごしたというのである。

ここには平安時代後期の大江匡房が著した『遊女記』の中に記述されている「上自卿相、下及黎庶、莫不接床笫施慈愛、又為人妻妾、殁身被寵（卿相から始め、庶民に至るまで、閨房に導き慈愛を施さずということなし。また妻妾と為りて、身を殁するまで寵せらる)」[9] という遊女の有り様が想起される。この有り様はまさしく人に恋慕されるのなら、その人に愛情を与え、思いを叶えようとつとめる和泉式部の姿に近似している。このように彼女の性格が「情け深い」がゆえ、物語の冒頭では彼女のことを「やさしき遊女」と形容しているのであろう。

柑子売として近づいた道命阿闍梨の求愛を受け、自ら宮中を出て男を訪ね、一夜を共に過ごすということは、一見積極的に行動する女であるように見えるが、実はまず男性側からの要望があってからそれを満たすために動くというものであった。このようなパターンも受け身の行動と言える。従って、遊女とされた小野小町も同様であったことは前節で示した通りである。

さて、誰にでも愛を施す､「やさしき」和泉式部であったが、やがて予期せぬ深刻な事態が起こる。それは近親相姦の禁忌を犯したことであった。これを機に和泉式部は仏門に入ることになったことは既に述べた。

それにもかかわらず、物語では母子相姦は厳しく糾弾されてはいない。これは、例え自分の息子に性的奉仕をするような深い罪を犯しても、仏に仕えれば最期には往生を成し遂げられる可能性が示されているからであろう。

かかる視点は、濱中修氏「御伽草子『和泉式部』『小式部』論」にて明快に指

[9] 大曽根章介・家永三郎等校注『日本思想大系 8　古代政治社会思想』(岩波書店、一九七九年) 154 頁。

摘されている。氏は『和泉式部』では、現実の式部をより誇張し、「仏教側からの、性にまつわる女の業の深さをより鮮明にする為にインセスト譚が活用されていると見えることが出来よう」[10] と述べている。この通りであろう。

三　美人としての因果

ここで赤木文庫『浄瑠璃物語』の一節にも触れておきたい。それは、千人と契る式部と前節にも触れた『小町草子』に「逢っても情を交わさない」小町との有り様には多少似ている点があるからである。少々長いが、原文を見よう。

（親から式部にお告げ）……なんちは、てんかに、かくれなきひしん、かしんと、むまれきて、人のけねんは、かすしらす、なんち、けねんを、きるゆへに、我さへちこくに、おつるなり

ねかはくは、たかきいやしき、をしなへて、あいしやうくはんを、たつならは、われも我身も、そくしんしやうふつうたかひなしと、をしへたまへは、ゆめは、程なく、さめにけり

しきふ、心におもふやう、みつから、くわこのいんくわのつたなくて、かほとにけうやう、申せ共、二しんの、しやうふつなきこそ、かなしけれ

いまはたゝ、をんなのしかたを、あらためて、おやのほたひを、とはんとて、たけにあまれる、かんさしを、すてにそらんと、したまへは

あみたによらいは、これをふひんに、おほしめし、八十はかりなる、らうそうとけんし、しきふか、かみそるところに、たちよりて

さても、なんちは、おやをたすけん、そのために、すてにさまを、かゆるとよ、それはなかなか、むやくなり

おやをたすけん、ためならは、たかきいやしき、をしなへて、あいしやうくはんを、たつならは、おやも我身も、もろともに、そくしんしやうふつ、うたかひなしと、の給ひて、かきけすやうに、うせ給ふ

（室町時代・赤木文庫『浄瑠璃物語』十二段目）

[10] 濱中修「御伽草子『和泉式部』『小式部』論」（『国文学解釈と鑑賞』第 60 巻 8 号所収、至文堂、一九九五年）123 頁。

式部の親が夢告するには、あなたが人の懸念を切るゆえ、私たちまでも地獄に落ちたのだ。どうか皆ひとしく愛を施してほしい。そうすれば、私たちとあなたは即身成仏できるという。式部が自分の因果のせいで親が成仏できないことを悲しんで、出家しようと髪を剃るところに、これを不憫に思う阿弥陀如来が老僧と化して現れる。親を助けたいのなら、やはり高き卑しきを拒まずに愛を施しなさい。そうすれば、親も式部も必ず即身成仏ができると式部に告げるのである。

これについて、濱中氏は「美人は多くの男の懸念を受けている、その苦を解消するために肌を許すことは滅罪の菩薩行である、と。これは遊女の所業の巧みな宗教的正当化にも通じる」[11] と論じているが、傾聴すべき指摘である。

田中貴子氏も似た観点がある。氏は『〈悪女〉論』にて生前、染殿后に愛欲と執念を抱いた僧正・真済が死後天狗、或いは紺青鬼になり后に憑くという伝説を挙げた。この説話には幾つかの結末があるが、注目するのは早稲田大学図書館蔵『雀のさうし』及び赤木文庫蔵『浄瑠璃物語』に二人の主人公が姫を口説く際に真済（紀僧正）・染殿后の説話と対照として志賀寺の聖・京極御息所の説話を引いたところである。『雀のさうし』では、京極御息所が聖に情けをかけたことで、聖が彼女を阿弥陀浄土に導く誓いを立てた。それに比べて、后が真済に情けをかけなかったせいで真済と一緒に后も伊豆国へ流されてしまった。『浄瑠璃物語』では、聖の恋を受け入れた京極御息所が堕地獄を避ける事ができたが、恋を受け入れなかった染殿后が青い鬼になり、死後は地獄に落ち、剣の山に迷っているという結末に至った。[12]

以上挙げた三つの伝説は全て室町時代に成立したものである。従って、当時では、美しい女が男に執念を燃やさせ、愛欲を生じさせた際、これを無視すれば、恋の罪が自分にもあり、堕地獄になる。逆に愛を受け入れ、男と契れば、成仏につながるという考え方が見られた。このような考え方は現代の「殺人は殺される方が悪い」という偏見と同じのようであり、今の時代では恐らく受け

[11] 濱中修「御伽草子『和泉式部』『小式部』論」124 頁の注 6。
[12] 田中貴子『〈悪女〉論』（紀伊國屋書店、一九九二年）140-148 頁。「雀のさうし」（横山重・松本隆信編『室町時代物語大成第七』所収、角川書店、一九七九年）550 頁。「浄瑠璃物語」（横山重・松本隆信編『室町時代物語大成第七』所収）314-315 頁。

入れられないものである。

このような考えは先述の『和泉式部』でも見られた。「小町は、人に恋ひられて、その怨念とけざれば、無量の咎によりて、その因果のがれず、……」[13] と、式部が思い、道命のもとへ訪れたのは先に述べた通りである。

一口で言うと、小野小町と同じく相手からの要求に応じ、奉仕する行動が物語にての和泉式部にも見られる。従って、小町でも式部でも遊女の「献身的要素」を多く求められたと言えよう。

第三節　往生及び遁世について

一　和歌の徳

先述の通り、和泉式部にまつわる物語の結末は仏門に入るパターンが多い。管見の限り、それは恐らく彼女のその和歌に結びつくのであろう。

性空上人のもとによみて遣はしける

雅致女式部

暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月

（平安時代中期・『拾遺和歌集』）[14]

その他、『古本説話集』[15] や『無名草子』[16] も同様に和泉式部と性空上人との話が載せられてあって、さらに話の続きがある。歌のお返しに上人から袈裟を得られ、それを着て往生したという筋が次のように加えられたのである。

御返事に、袈裟をぞつかはしたりける。病づきて失せむとしける日、その袈裟をぞ着たりける。歌の徳に後の世も助かりけむ、いとめでたき事。

---

[13] 大島建彦訳注『御伽草子集』（小学館、一九九二年）390 頁。
[14] 小町谷照彦校注『新日本古典文学大系 7　拾遺和歌集』（岩波書店、一九九〇年）394 頁。
[15] 中村義雄・小内一明校注『新日本古典文学大系 42　宇治拾遺物語・古本説話集』（岩波書店、一九九〇年）413-414 頁。
[16] 樋口芳麻呂・久保木哲夫訳注『新編日本古典文学全集 40　松浦宮物語・無名草子』（小学館、一九九九年）271-272 頁。

（平安時代末期か・『古本説話集』和泉式部歌事）

その気にや、和泉式部、罪深かりぬべき人、後の世助かりたるなど聞きはべるこそ、何事よりもうらやましくはべれ

（鎌倉時代初期・『無名草子』）

以上のように彼女は歌の徳により罪深い身から救い出され、往生を遂げたと結んでいる。

「暗きより」だけでなく、『一乗拾玉抄』巻三「化城喩品」でも、彼女の和歌の徳及び悟性の高さを描いている（勿論、二つ目の歌は真作か偽作かが本論では追究しない）と考える。法花とは法華、つまり『法華経』を指す。式部は女人成仏の方法について上人に尋ねたところ、上人が「無二亦無三」と答えた。それを聞いて式部が「無ク二無キ三ツ法リト聞ク時ハ五ツノ障リアラジトゾ思フ」[17] と詠んだ。

この一節から、崔恵珍氏は「『法華経』の中では、女人には五つの障りがあったので、それを償うために和歌を読み、歌うことによる罪を償うという発想がうまれたと考えられる」[18] とし、また、式部の二番目の歌には五障を否定して、女性も自身の意思により救済され得る、女の力で乗り越えたい主張が含まれており、他の物語で仏教に帰依して救済を求める和泉式部の造型とは異なり、新たな式部像が見られると論じている。[19]

傾聴に値する考え方ではあるが、多分に誤解を招きやすいところもある。まず、上人の言う「無二亦無三」とは、「十方仏土中、唯有一乗法[20] 、無二亦無三、除佛方便説（十方の仏土の中には、唯、一乗の法のみありて、二も無く、亦、三も無くし、仏の方便の説をば除く）[21] 」一句に出自である。意味としては、仏となる道はただ一つ一乗であり、二乗、三乗は衆生を導くための方便で

---

17 崔恵珍「和泉式部像の再検討――中世後期に変化する和泉式部像の一考察――」（『文藝論叢』第六十五号所収、大谷大学文芸学会、二〇〇五年）20 頁。
18 崔恵珍「和泉式部像の再検討――中世後期に変化する和泉式部像の一考察――」21 頁。
19 崔恵珍「和泉式部像の再検討――中世後期に変化する和泉式部像の一考察――」21 頁。
20 一乗法とは、悟りを開くための唯一の道である一乗真実の教え、主として法華経を指すのである。
21 坂本幸男・岩本裕訳注『法華経（上）』（岩波書店、一九六二年）106 頁。

ある（同経「方便品第二」[22]）。『法華経』が一乗の教えと言われるので、つまり成仏への道は『法華経』以外にないことが提示されている。「無二亦無三」の一句は鎌倉時代初期（1196～1202 頃か）に成立した『無名草子』にも見られる。『法華経』については、その素晴らしさを賛美し、人間として生まれてきて『法華経』にめぐり逢えたことが幸運であると書いている。[23] ここでは少なくとも当時の知識人が『法華経』を深く信仰していることを考慮するなら、「無二亦無三」の出自及び意味を当然把握していると考えるのが妥当であろう。次に、式部の言う「五障」とは、「提婆達多品第十二」に「又女人身。猶有五障。一者不得。作梵天王。二者帝釈。三者魔王。四者転輪聖王。五者仏身（又、女人の身には、猶五障有り。一には梵天王となることを得ず。二には帝釈、三には魔王、四には転輪聖王、五には仏身なり）」に由来している。これは、仏の弟子である舎利弗が「云何ぞ女身速かに成仏することを得ん（女人に五障があり、あなたが速やかに成仏するわけがない）」[24] と述べたのに対し、悟りを得た竜女が彼の前に一瞬男子に変わり、成仏したとする物語の一節にある。つまり、「五障」とは、女人の即身成仏を示す物語の一節から用いられているのである。

これは女身がそのまま成仏するというわけではないが、変成男子によって女性は救済される対象になり得ることを示している。従って、『法華経』には女人を差別する考えに基づいてはいるが、女人を救わないと言っているのではないことがわかる。そもそも『法華経』の趣旨は「一切衆生悉皆成仏」を説く経典である。むしろ他の経典と違って、『法華経』の教えは女性をも救済すると位置づけられているのである。

---

[22] 「方便品第二」（田村芳朗・藤井教公『仏典講座 7　法華経』上、大蔵出版、一九八八年）153 頁。

[23] 樋口芳麻呂・久保木哲夫訳注『新編日本古典文学全集 40　松浦宮物語・無名草子』186-187 頁。作者はこの世で捨てがたいものとして六項目を挙げ、その中の一つは『法華経』である。なお、『法華経』についての描写は次の通りである。

> また、「功徳の中に、何事かおろかなると申す中に、思へど思へどめでたくおぼえさせたまふは、法華経こそおはしませ。（中略）これは、千部を千部ながら聞くたびにめづらしく、文字ごとにはじめて聞きつけたらむことのやうにおぼゆるこそ、あさましくめでたけれ。『無二亦無三』とおほせられたるのみならず、『法華最第一』とあめれば、こと新しくかやうに申すべきにはあらねど、さこそは昔より言ひ伝へたることも、必ずさしもおぼえぬこともはべるを、これは、たまたま生まれあひたる思ひ出でに、ただこの経にあひたてまつりたるばかり、とこそ思ふに（後略）」

[24] 「提婆達多品第十二」（藤井教公『仏典講座 7　法華経』下、大蔵出版、一九九二年）647 頁。

ところで、平安時代の浄土教における女人成仏は、『法華経』を忠実に解釈し、女性は死後の往生によって、転女成男し、または、臨終出家によって、変成男子し、それから成仏に至ることを説いていた。[25]

だが、鎌倉時代になると、女人成仏は飛躍を遂げていく。「鎌倉新仏教」の内、浄土教の開祖と目される法然は、女人往生については『無量寿経』に語られた法蔵菩薩の四十八願中の第三十五願[26] を「女人往生の願」と名付け、さらに『無量寿経釈』では「十方世界有女人処即有地獄。云云。加之内有五障、外有三従。五障者、一者不得。（中略）乃由弥陀大願力故、女人称仏名号、正命終時、即転女身得成男子。弥陀接手菩薩扶身、坐宝華上、随仏往生、入仏大会証悟無生。（中略）或有道俗云、女人不得生浄土者、此是妄説不可信也。云云（十方世界に女人ある処には、即ち地獄ありと云々。しかのみならず、内に五障あり、外に三従あり。五障とは、一には、不得云々、（中略）乃ち弥陀の大願力によるが故に、女人仏の名号を称えて、正しく命終の時に、即ち女身を転じて男子となることを得。弥陀接手し、菩薩身を扶けて、宝華の上に坐して、仏に随って往生し、仏の大会に入って無生を証悟す。（中略）或いは道俗ありて云く、女人浄土に生ずることを得ずといわば、これはこれ妄説なり、信ずべからず）[27] 」と、女の最期に男となり、往生できると述べている。[28] さらに親鸞になると、『浄土和讃』にて第三十五願を「変成男子の願をたて、女人成仏ちかひたり」と述べ、法然の「女人往生」より積極的とも思える「女人成仏」の語彙を使っている。[29]

一方、日蓮は『開目抄』にて「竜女が成仏これ一人にはあらず、一切の女人の成仏をあらわす。法華経已前の諸の小乗経には女人の成仏をゆるさず。諸の大乗経には成仏往生をゆるすやうなれども、或は改転の成仏にして、一念三千

---

[25] 西口順子「成仏説と女性――「女犯偈」まで――」（『日本女性史論集 5　女性と宗教』所収、吉川弘文館、一九九八年）347 頁。

[26] 「設我得仏、十方無量不可思議、諸仏世界、其有女人、聞我名字、歓喜信楽、発菩提心、厭悪女身。寿終之後、復為女像者、不取正覚（たとい、われ仏となるをえんとき、十方の無量・不可思議の諸仏世界、それ、女人ありて、わが名字を聞き、歓喜信楽し、菩提心を発し、女身を厭悪せん。（その人）寿終りてのち、また女像とならば、正覚を取らじ）」中村元・早島鏡正・紀野一義訳註『浄土三部経（上）』（岩波書店、一九九九年）161 頁。

[27] 大橋俊雄訳『法然全集　第一巻』（春秋社、二〇一〇年）92・97 頁。

[28] 福原隆善「法然上人の女人往生論」（日本仏教学会編『仏教と女性』所収、平楽寺書店、一九九一年）34 頁。

[29] 栗原広海「親鸞の女性観」（日本仏教学会編『仏教と女性』所収、平楽寺書店、一九九一年）64-65 頁。

の成仏にあらざれば、有名無実の成仏往生なり。挙一例諸と申して、竜女が成仏は末代の女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし」[30] と述べ、「千日尼御前御返事」にも「此の経は女人成仏を手本としてとかれたりと申す」[31] と述べ、竜女成仏が一切の女性成仏の可能性の典拠と言っている。[32]

以上のことを踏まえて、改めて式部の歌を見てみよう。これはおそらく『法華経』に帰依することにより、女人は五障があるとしても救済を得られ、成仏を遂げられるという意味ととれる。式部の和歌の徳とは、上人に近づき、法華の教えを体得するための方便であったとみるべきだろう。

なお、前章にも触れた「室泊の遊君、鄭曲を吟じて上人に結縁する事（『発心集』巻第六）」[33] に、遊女がこの一首を歌うことにて、自分の救われたい心情を適切に聖に言い表している。これは歌の作者である式部にとっても一つの功徳と言えよう。

二　謡曲「東北」

これまで、和歌の徳によって往生を遂げた物語について検討してきたが、これと関連して、同じく和歌の徳によって成仏を遂げた話をもうひとつ提示しておきたい。それは室町時代・世阿弥作の謡曲「東北」[34] である。まず内容を概観しておこう。

東国から都へ旅をしてきた僧が、見事な梅の咲く東北院を訪れた。そこに一人の女が現れ、梅について詳しく語り、その中でこの木が和泉式部の手植えであることを伝える。女はやがて、「私こそ梅の主です」と明かし、夕日に紅く染まった梅の木陰に隠れ、姿を消す。後に僧は門前の人からの話で、女は和泉式部の霊であろうと悟った。月下の梅のもとで僧が法華経を読誦していると、和泉式部の霊が現れ、自分は今まで詠んできた和歌の徳によって悟りを得て成仏し、歌舞の菩薩となっていることを明かした。その後、和泉式部は、色恋に染

---

30 『開目抄』下（『新編日蓮大聖人御書全集』所収、創価学会、一九五二年）223 頁。
31 「千日尼御前御返事」（弘安元年七月二十八日）（『新編日蓮大聖人御書全集』所収）1311 頁。
32 桑名貫正「日蓮聖人の女性観」（日本仏教学会編『仏教と女性』所収、平楽寺書店、一九九一年）106、108 頁。
33 大曽根章介・久保田淳編『鴨長明全集』（貴重本刊行会、二〇〇〇年）206 頁。
34 小山弘志・佐藤健一郎訳注『新編日本古典文学全集 58　謡曲集 1』（小学館、一九九七年）247-258 頁。

んだ昔の生活を思い出し、涙を流すが、それを人に見せるのも恥ずかしいと方丈の中に入って姿を消した。そこで僧は我に返り夢から覚める。

以上のように、この謡曲では和泉式部が和歌の徳により往生を遂げた上、さらに歌舞の菩薩にもなるとも記されている。世阿弥がこのような物語を作ったのは、中世の社会において「和歌の力」を重んじる風潮があったからであろう。そこで「暗きより」という人口に膾炙している釈教歌を持つ和泉式部を題材にしたと考えられる。

三　遁世譚の定着

小野小町は老後零落れて野晒しにただただ白骨だけが残して消えた、或いは乞食の老女となり、とにかく悲惨な余生を送るとされたのに対し、和泉式部は遁世者として結末を迎える場合が多く見られる。これについて今関敏子氏は、小町の驕慢な「拒む女」であったため、老後に落魄してついに野晒しにしたことに対し、和泉式部は恋愛の情趣がよく分かる「受容する女」であったため、後世の人は和泉式部に対してかなり寛大に扱い、物語に往生を遂げさせたと論じている。[35]

しかし管見の限りでは、小町は晩年、醜悪な老女・乞食として描かれていることもあれば、観音の化身として描かれていることもある。つまりそれは全て小町の「拒む女」に対しての悪質的描写とは言えないと思う。理由としては前節の冒頭にも言及したように、小町は実存した人物かと未だに未明がために、物語の性質やエピソードによってかなり自由に扱えるキャラクターであったことがあげられよう。一方、式部には「暗きより」の和歌が世に広まっており、この一首によって式部が悟りを得たと見做されている。それ故、物語中に多く使われ、次第に遁世譚が定着していったと考えられるのである。

ただし、『小町草紙』と『和泉式部』を比較してみると、小町の場合、若い時に神仏に礼拝せず、老後落ちぶれた時になりようやく過去の過ちを懺悔している。一方、和泉式部の場合、若い時から法華八講に聴講し、釈教歌も詠むなど、仏に厚く帰依している姿勢が読み取れる。このような二人の仏に対する態度の

[35] 今関敏子『〈色好み〉の系譜――女たちのゆくえ』（世界思想社、一九九六年）65-66 頁。

差が二人の臨終の違いとなって表れたとも考えられよう。

おわりに

本章では、中世の物語における和泉式部の遊女及び遁世者としての性格について検討した。以上に挙げた物語からみると、小町以上に遊女としての性格が強く、そのことは「やさしき」性格によって、『遊女記』に描写された遊女と同様の男に対する姿勢から窺われる。彼女の遊女像から当時の男性が遊女に求めているものを充分反映していると見られよう。ただし、小町とは異なる態度と行為を示したとはいえ、結果的には二人とも男性の求愛に対して「受け身」で、求めてきた相手に尽くし、身を委ねていたことがわかる。中世遊女としての哀憐が物語を通じて十分に我々に伝わってくる。

大島由紀夫氏が「式部の詠歌（偽作を含めて）は呪文歌・託宣などとして宗教的な場にも転用されており、唱導・信仰の世界の中でさまざまな式部伝説が生成・展開した」[36] と指摘した。和泉式部は罪深い女人として造型されることが多いが、和歌の徳で悟りを得て、仏教に帰依して往生を遂げたという女人往生の手本ともなった。同じく罪業重いとされる遊女が罪を償うための最善の法が仏教に帰依することであることを、物語に通じて提示しようとしたと考えられる。

遊女というのが性的放縦者とは等しくないことは小野小町及び和泉式部二人にまつわる伝説を通して明らかである。『浄瑠璃物語』に千人と契る和泉式部のように、遊女は苦を背負い、男性の欲望を成就することにより滅罪に達するのを菩薩行の一つに見做されていたのである。

[36] 大島由紀夫「『和泉式部縁起』――阿弥陀信仰の主人公――」（『国文学解釈と鑑賞』第 60 巻 8 号所収、至文堂、一九九五年）130 頁の註 19。

第三章　　遊女説話の前提（１）
―仏典における女人罪業観と救済思想―

はじめに

本論で列挙した物語のほとんどは仏教的な女性観に彩られていたことはこれまで見てきた通りである。これら物語の中には、女性を仏教の神様である観音菩薩や普賢菩薩の化身としての描写すら見られるものもある。そこで、本章では、中世の遊女説話の前提となっている女人罪業観と救済思想について詳しく論じてみたいと思う。女人救済に関わる仏典は、『妙法蓮華経』(以下、『法華経』と略称）を始め、『理趣経』・『華厳経』などがある。

まず、最も女性が特に信仰したと言われる『法華経』における女人救済について、次に、伝説に頻繁に出現する遊女観音変化譚の下地と思われる菩薩と女性との繋がりについて検討したい。そして次章において、再度、中世の遊女説話に見られる仏教女性観について確認し、その女性観の形成過程を、平安・鎌倉仏教史を踏まえて議論したい。

第一節　法華経と女性

『法華経』は仏教の代表的経典であり、一切の衆生を救済し、万人の成仏を説くため、「諸経の王」[1] と言われている。『日本書紀』推古十四年（606）秋七月条に聖徳太子が法華経を講じ、推古天皇が大喜びという記事が見られる。[2] ま

[1] そのような思想は『法華経』に散見する。例を挙げると、安楽行品第十四には「此法華経。是諸如来。第一之説。於諸説中。最為甚深。末後賜与。（中略）於諸経中。最在其上。（この法華経は、これ諸の如来の第一の説にして、諸の説の中において、最も為れ甚深なるものなれば、末後に賜い与うること、（中略）諸の経の中において、最もその上に在りて）」、また、薬王菩薩本事品第二十三には「諸水之中。海為第一。此法華経。亦復如是。於諸如来。所説経中。最為深大。（中略）於諸経中。最為其上。（諸水の中にて、海は為れ第一なるが如く、この法華経も亦復、かくの如く諸の如来の所説の経の中において、最も為れ深大れたり。（中略）諸経の中において、最も為れその上なり）」がある。要するに、この『法華経』は諸経の中において、最も為れその上なりと言い切れる。以上、坂本幸男・岩本裕訳注『法華経（中）』の 272-274 頁、及び『法華経（下）』の 196 頁（岩波書店、一九六七年）を参照。

[2] 『日本書紀』巻二十二・推古十四年の項に次の記述がある。

た、太子の著した『三経義疏』中の一つ『法華義疏』は『法華経』の注釈書であることから見ると、仏教伝来してきた間もなく『法華経』は重要視される経典となったことが明らかである。

平安時代に至ると、『枕草子』に清少納言は法華八講受講の様子と心境を示していること[3]、仏教説話集『大日本国法華験記』が成立されたこと、『無名草子』に作者が『法華経』を嘆美することや『和泉式部』に道命阿闍梨が宮中に法華八講を講ずるエピソードなどの例から考えてみると、『法華経』は古人の生活に不可欠な存在であることは当時の文芸作品を通じて垣間見られる。従って、『法華経』は仏教の重要な経典の一つであり、日本仏教と切り離すことはできないであろう。

かかる『法華経』の特色は、「女人成仏」を説くところに求められる。とりわけ常に引用されるのが同経の「提婆達多品第十二」である。該品の前半部は悪人の提婆達多が成仏したことを示し、後半は竜女成仏の話が記されている。この品は罪悪の人も善人同様に成仏ができ、女性も男性同様に成仏ができることという趣旨を説いた品である。[4] その後半部の竜女成仏についての原文を次に示そう。

> 文殊師利言。我於海中。唯常宣説。妙法華経。智積菩薩。問文殊師利言。此経甚深微妙。諸経中宝。世所希有。頗有衆生。勤加精進。修行此経。速得仏不。文殊師利言。有。娑竭羅竜王女。年始八歳。智慧利根。善知衆生。諸根行業。得陀羅尼。諸仏所説。甚深秘蔵。悉能受持。深入禅定。了達諸法。於刹那頃。発菩提心。得不退転。辯才無碍。慈念衆生。猶如赤子。功徳具足。心念口演。微妙広大。慈悲仁譲。志意和雅。能至菩提。智積菩薩

秋七月に、天皇、皇太子を請せて勝鬘経を講かしめたまふ。三日に説き竟へつ。
是歳、皇太子、亦法華経を岡本宮に講く。天皇、大きに喜びて、播磨国の水田百町を皇太子に施りたまふ。因りて斑鳩寺に納れたまふ。

以上、坂本太郎・家永三郎等校注『日本古典文学大系 68　日本書紀下』岩波書店、一九六五年）188 頁。

[3] 池田亀鑑・岸上慎二等校注『日本古典文学大系 19　枕草子・紫式部日記』（岩波書店、一九五八年）75-76 頁。

[4] 高嶌正人「七、八世紀における法華経信仰の受容と展開」（『法華経の思想と展開』所収、平楽寺書店、二〇〇一年）454 頁。

言。我見釈迦如来。於無量劫。難行苦行。積功累徳。求菩薩道。未曾止息。観三千大千世界。乃至無有。如芥子許。非是菩薩。捨身命処。為衆生故。然後乃得。成菩提道。不信此女。於須臾頃。便成正覚。言論未訖。時竜王女。忽現於前。頭面礼敬。却住一面。以偈讃曰　**深達罪福相　遍照於十方　微妙浄法身　具相三十二　以八十種好　用荘厳法身　天人所戴仰　竜神咸恭敬　一切衆生類　無不宗奉者　又聞成菩提　唯仏当証知　我闡大乗教　度脱苦衆生**　爾時舎利弗。語竜女言。汝謂不久。得無上道。是事難信。所以者何。女身垢穢。非是法器。云何能得。無上菩提。仏道懸曠。径無量劫。勤苦積行。具修諸度。然後乃成。又女人身。猶有五障。一者不得。作梵天王。二者帝釈。三者魔王。四者転輪聖王。五者仏身。云何女身。速得成仏。爾時竜女。有一宝珠。価直。三千大千世界。持以上仏。仏即受之。竜女謂智積菩薩。尊者舎利弗言。我献宝珠。世尊納受。是事疾不。答言。甚疾。女言。以汝神力。観我成仏。復速於此。当時衆会。皆見竜女。忽然之間。変成男子。具菩薩行。即往南方。無垢世界。坐宝蓮華。成等正覚。（後略）

内容を簡単に確認しておきたい。智積菩薩は竜宮で教化をして帰って来た文殊師利菩薩に様子を問う。文殊は、常に『法華経』を説いてきて、その教化したものの数は数えきれないほどと答えた。智積はまた、『法華経』は甚深微妙で諸経中の宝、この経を修行して仏となることができるのかと尋ねる。すると、娑竭羅竜王の八歳の娘は智慧があり、諸仏の所説を全て受持し、功徳を具足して、悟りに到達していると文殊が智積に答えた。それを聞いた智積は、我が釈迦如来は長い歳月の間、難行苦行をし、ようやく仏の悟りを成就したのに、竜女はほんのわずかな間で悟りを得ることが出来るとは信じがたいと疑いを示した。すると、その竜女は釈迦の前に姿を現わし、釈迦を嘆美した。その時、舎利弗が竜女に向かって言った。貴女はいともたやすく悟りを得ることは信じがたい。女身は垢穢であり、また女人の身には五障がある。一には梵天王となることを得ず、二には帝釈、三には魔王、四には転輪聖王、五には仏身なり。貴女は速やかに成仏することができるわけがない。竜女は宝樹を釈迦に献上し、釈迦はそれを受けた。竜女は、世尊が私の献上した宝珠を受け取ることは速いかと智積と舎利弗に問う。二人は速やかと答えた。すると竜女は、私の成仏を

見よ。そのことより速やかであると、たちまち変成男子（女身が転じて男子となる）にし、悟りを得て、仏の徳を具したのである。[5]

この「提婆達多品」では、女性は女性の身で成仏し難いことを前提として『法華経』による女性成仏について説いている。寛和元年（986）に慶滋保胤が冷泉天皇第二皇女尊子内親王の法要に際し、記した追善願文である「為二品長公主四十九日御願文」に「晨昏所誦者提婆品、造次所念者弥陀尊」[6] の記述するように公主は生前早晩常に「提婆達多品」を読誦していたことが書かれている。また、『更級日記』にも「夢にいと清げなる僧の黄なる地の袈裟着たるが来て、法華経五の巻をとく習へといふと見れど、人にも語らず……」[7] と見え、その第五巻には竜女成仏の話が記されている提婆達多品第十二が含まれている。[8]

その他、『法華経』にはまだまだ女性救済の思想が見られる。例として「勧持品第十三」及び「薬王菩薩本事品第二十三」が挙げられる。「勧持品第十三」には、「爾時佛姨母摩訶波闍波提比丘尼。與學無學比丘尼。六千人俱。従座而起。（中略）及六千學無學比丘尼。俱爲法師。汝如是。漸漸具菩薩道。當得作佛。号一切衆生喜見如來。應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。憍曇彌。是一切衆生喜見佛。及六千菩薩。轉次授記。得阿耨多羅三藐三菩提。（その時、仏の姨母、摩訶波闍波提比丘尼と学・無学の比丘尼六千人とは、倶に座より起ちて、（中略）及び六千の学・無学の比丘尼も倶に法師となるべし。汝はかくの如く、漸漸に菩薩の道を具して、当に仏と作ることを得、一切衆生喜見如来・応供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊と号くべし。憍曇弥よ、この一切衆生喜見仏と、及び六千の菩薩は、転次に記を授けて、阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん）」[9] と述べ、釈迦は摩訶波闍波提と六千人の比丘尼に予言を授与し、「悟り」の境地に至ると予言したのである。「薬王菩薩本事品第二十三」には、「若有女人。聞是薬王菩薩本事品。能受持者。尽是女身。後不復受。若如来滅後。後五百歳

---

[5] 以上、「提婆達多品第十二」（坂本幸男・岩本裕訳注『法華経（中）』218-224 頁）、及び藤井教公『仏典講座 7　法華経』下（大蔵出版、一九九二年）644 頁を参考のもとに書き出した。
[6] 大曾根章介・金原理・後藤昭雄校注『新日本古典文学大系 27　本朝文粋』（岩波書店、一九九二年）369 頁。
[7] 西下經一等校注『日本古典文学大系 20　土左・かげろふ・和泉式部・更級』（岩波書店、一九五七年）493 頁。
[8] 高嶌正人「七、八世紀における法華経信仰の受容と展開」444 頁を参照。
[9] 坂本幸男・岩本裕訳注『法華経（中）』228-230 頁。

中。若有女人。聞是経典。如説修行。於此命終。即往安楽世界。阿弥陀仏。大菩薩衆。囲繞住処。生蓮華中。宝座之上。(若し女人有りて、この薬王菩薩本事品を聞きて能く受持せば、この女身を尽くして後に復、受けざらん。若し如来の滅後、後の五百歳の中にて、若し女人有りて、この経典を聞きて、説の如く修行せば、ここにおいて命終して、即ち安楽世界の阿弥陀仏の、大菩薩に囲繞せらるる住処に往きて、蓮華の中の宝座の上に生れん)」[10] と述べ、女人はこの経を授持すれば、臨終に直ちに阿弥陀仏、菩薩に囲まれる安楽世界（極楽浄土）に住むことになるという。

以上から、当時の知識層の女性にとって『法華経』が大きな救いになると考えられて読誦されていたことが窺える。

第二節　菩薩と女性

菩薩は阿弥陀仏とともに、広く信仰される仏教の神様である。菩薩と言えば、大慈大悲を本誓とし、母性的・慈愛なイメージを持つ観世音菩薩、『法華経』により女性の信仰を集め、白象に乗る普賢菩薩、智慧を象徴する存在として知られ、獅子に乗る文殊菩薩や子供の守り神であり、地獄を司る地蔵菩薩が想起される。

菩薩は成仏を求める修行者でありながら、仏の教化、衆生済度を助ける者である。以下、具体的な例として、観世音菩薩をとりあげ、検討したい。

観音菩薩が現れる古い経典として、最も代表的なのは『法華経』観世音菩薩普門品第二十五、別名『観音経』である。該経によれば、観世音菩薩の名は衆生の苦悩を直ちにその音声を観じて、皆解脱を得られることを由来している。この観音の誓願とは、世間における一切の苦厄や恐怖不安を除去し、抜苦与楽を施すことであり、人が観音菩薩を敬い、供養すれば、あらゆる欲望が満たされると説く。さらに観音は衆生の姿を応じて三十三身に化身して現し、衆生のために法を説き、種々の形を以て、衆生を度脱する慈悲なる菩薩とされる。観音信仰が日本に入った時期は恐らく飛鳥・白鳳時代に追善的信仰という形で伝

[10] 坂本幸男・岩本裕訳注『法華経（下）』204 頁。

わっていたとされる。[11] 奈良時代以降、密教的性格を持ちながら、鎮護国家的な役割をも有するが、次第に密教的現世利益を担うようになる。[12] しかし、十世紀頃から貴族社会における現世否定的浄土思想（宿世観や無常感）の発達により、観音の性格は人々の厭離穢土欣求浄土・六道輪廻抜苦の欲求に応じ、呪術的現世利益的性格の上に救苦的来世的性格をも加わることになる。[13] ただし、祈願者にとっては、現世利益・現世の救済を求める対象にすぎない。[14] 観音菩薩のその大慈大悲、救済の性格、その功徳・利益があらゆる人々の心を満足させると信じられた故、この観音の信仰が次第に民間に広く普及したのである。

観音の三十三身には仏身（ぶっしん）・辟支仏身（びゃくしぶっしん）・声聞身（しょうもんしん）・梵王身（ぼんおうしん）・帝釈天身（たいしゃくてんしん）・自在天身（じざいてんしん）・大自在天身（だいじざいてんしん）・天大将軍身（てんたいしょうぐんしん）・毘沙門身（びしゃもんしん）・小王身（しょうおうしん）・長者身（ちょうじゃしん）・居士身（こじしん）・宰官身（さいかんしん）・婆羅門身（ばらもんしん）・比丘身（びくしん）・比丘尼身（びくにしん）・優婆塞身（うばそくしん）・優婆夷身（うばいしん）・長者婦女身（ちょうじゃぶにょしん）・居士婦女身（こじぶにょしん）・宰官婦女身（さいかんぶにょしん）・婆羅門婦女身（ばらもんぶにょしん）・童男身（どうなんしん）・童女身（どうにょしん）・天身・竜身（てんしん・りゅうしん）・夜叉身（やしゃしん）・乾闥婆身（けんだっぱしん）・阿修羅身（あしゅらしん）・迦楼羅身（かるらしん）・緊那羅身（きんならしん）・摩睺羅迦身（まごらかしん）・執金剛身（しゅうこんごうしん）があり、中には女性の姿も含まれている。また、衆生が輪廻転生する六道に衆生を救う思想から聖観音、千手観音、馬頭観音、十一面観音、准胝観音（天台系統では不空羂索観音）、如意輪観音という六観音も生まれた。その理由としては、当時の社会では観音に対する信仰が、当該社会における現世利益から死後に六道抜苦を求める所謂来世的信仰へ変質する流れの中で、現当二世を兼ね備えた利益を求めるものであったからである。

ただし、観音だけではなく、基本的に菩薩は衆生を教化するために様々な姿として示現し、ただ単に説法するだけでなく、中にも女身に化し、「性」を手段として衆生を誘惑し、最後に教化の目的を達する例も幾つかがある。例えば伝説では、十一面観音は障礙神であった象頭人身の毘那夜迦（ヴィナーヤカ）を済度するために美女を化し現れたとある。美女に一目惚れをした毘那夜迦に対し、美女が条件として仏法に信奉すれば願いを叶えさせると言い、それを受け入れた毘那夜迦が美女と抱き合うことにより歓喜を得たので、歓喜天というよ

[11] 速水侑「奈良朝の観音信仰について」（『観音信仰』所収、雄山閣、二〇〇七年、オンデマンド版）158 頁。
[12] 速水侑「平安時代における観音信仰の変質」（『観音信仰』所収）168 頁。
[13] 速水侑「平安時代における観音信仰の変質」（『観音信仰』所収）182-186 頁。
[14] 佐藤泰舜「六朝時代の観音信仰」（『観音信仰』所収）30 頁。

うになり、仏教の護法神となったという。

他の仏教経典にも似た話が説かれている。『維摩経』とは、釈迦如来の在家弟子である維摩居士（ヴィマラ・キールティー）にまつわる物語である。悟りを開いた彼は釈迦如来の教化を助けるため、様々な人々に説法をしていたという。該経の巻第三・仏道品第八に「或現作婬女　引諸好色者　先以欲鉤牽　後令入佛道（或いは現じて婬女と作りて、諸もろの好色者を引く、先には欲の鉤を以って牽き、後に仏道に入らしむ）」[15] という一節がある。彌永信美氏によれば、菩薩は「婬女」とも現れて「諸好色者」引き寄せ、「先ず欲相をもって〔彼らを〕招き、後に仏智を修せしむ」とは大乗的な方便思想の最も「過激」な現れの一つとも言えるだろうと論じている。[16] このような思想はよく誤解され、実は、性に欲望のある人にまず性を手段として接近し、仏道に導き入れたら欲望を離れさせることができるとの考え方が示されているという。『華厳経』巻第六十八・入法界品第三十九にも、すでに離欲実際という清浄の法門を成就した婆須蜜多（ヴァスミトゥラー）という遊女がいて、彼女は悟りへの道を求めている善財童子に次のように説いている。

> 善男子。我得菩薩解脱名離貪欲際。隨其欲樂而為現身。若天見我。我為天女。形貌光明。殊勝無比。如是乃至人非人等。而見我者。我即為現人非人女。隨其樂欲。皆令得見。若有衆生。欲意所纏。來詣我所。我為説法。彼聞法已。則離貪欲。得菩薩無著境界三昧。（中略）若有衆生抱持於我、則離貪欲、得菩薩攝一切衆生恒不捨離三昧。若有衆生嗟我脣吻、則離貪欲、得菩薩增長一切衆生福德藏三昧。凡有衆生親近於我、一切皆得住離貪際。入菩薩一切智地現前無礙解脱（善男子よ。我は已に離欲実際という清浄の法門を成就せり。若しも天が我を見なば、我は天女となる。若し人が我を見なば、我は人女となる。乃至非人が我を見なば、我は非人女と為らん。形体姝妙に、光明の色像も殊勝にして比無し。若し衆生にして欲に纏わるる者ありて、来りて我が所に詣りなば、其が為に法を説きて、皆悉く欲を離

[15] 大正大学綜合仏教研究所梵語仏典研究会編『梵藏漢対照『維摩經』』（大正大学出版会、二〇〇四年）319 頁。漢訳書き下し文の部分は高崎直道・河村孝照校註『新国訳大蔵経　文殊経典部 2』（大蔵出版、一九九三年、64 頁）を参照。

[16] 彌永信美『観音変容譚――仏教神話学Ⅱ』（法蔵館、二〇〇二年、279 頁）を参照。

れ、〈無著の境界〉という三昧を得しめん。（中略）若し衆生有りて我を阿梨宜せん者は、〈摂一切衆生〉という三昧を得ん。若し衆生有りて我を阿衆鞞せん者は、〈緒功徳密蔵〉という三昧を得ん。是の如き等の類の一切衆生は、来りて我に詣らん者は、皆〈離欲実際〉という法門を得ん)。[17]

これも先ほど述べた思想と同様、婆須蜜多は近いてくる人々の欲望にそれぞれ応じて、それから人に離欲への道を引き入れるのである。

小括

以上述べてきたように、『法華経』には、周知の「竜女成仏」のほか、仏が六千人の比丘尼に成仏の約束をしたこと及び『法華経』を受持した女性は極楽往生を遂げることを説かれている。よって、女性に特別な存在として位置づけられ、特に篤く信仰されてきたと考えられる。

また、本論では、菩薩の性格及び教化の方便として屡々女身に化し衆生を仏道に引導する事と例も紹介した。これが後世の説話に非常に重要な素材を提供し、女人成仏説・遊女観音変化譚などが生み出される土台となったと考えられる。

[17]『大方廣佛華嚴經（八十華嚴）』下冊（台北市：財團法人佛陀教育基金會、二〇一三年）2015-2016頁。漢訳書き下し文の部分は中村元『現代語訳大乗仏典5　『華厳経』『楞伽経』』（東京書籍、二〇〇三年）81-83頁。

第四章　　遊女説話の前提（２）
―平安・鎌倉時代の女人罪業観と救済思想―

はじめに

この章では前章に引き続き、中世遊女説話の前提となっている女人罪業観と救済思想について検討を加えたいと思う。ここでは、前章にて検討した仏典における女性観が日本にいつ、どのように受容されたかに留意し、中世遊女説話に強い影響を与えたと思われる、平安・鎌倉仏教史における様々な事例を検討したいと思う。

第一節　物語における女人罪業

まず、前の二章に引用された物語に見られる女人罪業思想について見てみよう。

> 業平仰せけるは「さらぬだに、女は罪深くして、業障の雲あつく、真如の月も晴れやらず、心の水も濁りつつ、思ひと思ふことは、悪業煩悩の絆なり。されば、仏も、経に第一嫌ひ給ふ。しかりとはいへども、男なくして女なし。仏なくして衆生なし。愛別離苦の理、みな目の前ぞかし」と語り給へば、小町は、手を合わせて礼し、その後、懺悔を語りけり。
>
> （『小町草紙』）

> さてもなんち、われらふうふか、ほたひを、よきにとふてえさすれと、さらにしやうふつ、せさるなり
> ゆへを、いかにと申に、なんちは、てんかに、かくれなきひしん、かしんと、むまれきて、人のけねんは、かすしらす、なんち、けねんを、きるゆへに、我さへちこくに、おつるなり
> （中略）

女人ちこく、しのふたんふつしゆち、けめんほさつ、なんしによやしやと、とくときは、によ人は、そも、菩さつのたいをは、けんすれ共、ないしんは、やしやの、ことくにて、このよのおにとは、これをいふ

（中略）

たいはほんにも、とかれたり、一しや、ふとくさほんてんわう、二しや、たいしやく、三じや、まわう、四しや、てんりんじやうわう、五しや、ぶつしん

うんかによしん、そくとくじやうぶつと、どくしゆしたまふ、くりきにより、五つのくをはのかるれ（のかるれ共）、三づのくをはのかれす

三かいに、かきもなし、六たうに、ほとりなし、をんなに三つのいゑなしと、ほとけも、かやうにとき給ふ

（赤木文庫『浄瑠璃物語』十二段目）

上述のように、『小町草紙』は、小町が女として生まれた時から罪から逃れない定めにあるとする、即ち女人五障説に基づいていることが窺える。

『浄瑠璃物語』中清水寺の観音の化した坂者が和泉式部について「女人地獄使、能断仏種子、外面似菩薩、内心如夜叉」[1]（女人は地獄の使いであり、成仏の妨げとなる。表面は菩薩のようだが、心は鬼のようだ）と述べ、まさにこの世の鬼として捉え、また、女人は「提婆品にも説かれたり。一者不得作梵天王。二者帝釋。三者魔王。四者轉輪聖王。五者佛身。云何女身速得成佛と読誦し給う、功力により、五つの苦をば逃れる、三つの苦をば逃れず。三界に垣なし六道に辺なし[2]、女に三つの家無し[3]と、仏もかように説き給う」[4]と記し、女は『法華経』の功力により五障を逃れるが、三従に逃れ得ないと説いている。

---

[1] 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成第七』（角川書店、一九七九年）318頁。

[2] 「三界」は欲界・色界・無色界、即ち全世界のこと。「六道」は地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六種の迷界のこと。三界六道のそのどこに行くかは、前世の業によるもので、生まれつきで決まるものではない。（日本国語大辞典 http://www.jkn21.com/stdsearch/displaymain 最終閲覧時間：2013年5月5日）

[3] 女は、幼少のときは親に従い、嫁に行っては夫に従い、老いては子に従わなければならないものであるから、この広い世界で、どこにも安住できるところがない。女は三界に家なし。女に家なし。（日本国語大辞典 http://www.jkn21.com/stdsearch/displaymain 最終閲覧時間：2013年5月5日）

[4] 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成第七』319頁。

以上に挙げた二つの例のみならず、どの物語にでも見られるのが主に女人五障説である。

『法華経』には「提婆達多品第十二」に竜女成仏、また「勧持品第十三」に六千人の比丘尼は悟りの予言を得たこと、「薬王菩薩本事品第二十三」に女人往生のことは女人救済の思想が見られるゆえ、女性にとって大きな救いであり、事あるごとに写経して奉納したようである。しかしながら、女人救済思想である変成男子思想の根底には女性性の否定があることは確認しておかねばならないであろう。

当時の社会では、仏教の女人蔑視観・五障説、若しくは女身垢穢観などが受容され、遊女に対する見方もこのような観点に影響され、賤視が増していったと考えられる。五障説は前の述べた通りであるが、女身垢穢観とは、女性の体を汚れた存在と看做すものである。例として仏教の初期教典である『増一阿含経』巻第四十一・「馬王品第四十五」に「夫為女人有九悪法。云何為九？一者女人臭穢不浄、二者女人悪口、三者女人無反復、四者女人嫉妒、五者女人慳嫉、六者女人多喜遊行、七者女人多瞋恚、八者女人多妄語、九者女人所言軽舉。（夫れ女人は九の悪法有りと為す。云何が九と為すや、一に女人は臭穢にして不浄なり。二に女人は悪口す。三に女人は反復なし。四に女人は嫉妬す。五に女人は慳嫉なり。六に女人は多く遊行を喜ぶ。七に女人は瞋恚多し。八に女人は妄語多し。九に女人は言うところ軽挙なり）」[5] とあるように、女人は臭く穢れており不浄であるとする。[6]

このような差別観は中国儒教の三従説（在家従父、出嫁従夫、夫死従子）を伴って、日本に伝来し、また、さら日本独特の触穢観念によって、生理や出産の際に流出した血液は血の穢れとみなされる不浄の身とされた。それゆえ、女性は成仏し難い存在として位置づけられるに至る。早くも平安時代末期の仏教説話集『宝物集』には「女人は煩悩の源、一度も犯しつれば、五百世の間、かれにしただひて六趣に輪廻す。又は、毒蛇はみるとも女人はみるべからず」[7] や

[5] 全佛編集部編『増一阿含經』第六冊（台北市：全佛文化出版社、一九九七年）1527 頁。漢文書き下し文の部分は岩野真雄編『国訳一切経　印度撰述部　阿含部九・十』（大東出版、一九六九年）316 頁。

[6] 勝浦令子「女性と仏教」（末木文美士等編『新アジア仏教史 11 日本Ⅰ　日本仏教の礎』所収、佼成出版社、二〇一〇年）390 頁。

[7] 『宝物集』巻第五（小泉弘・山田昭全校注『新日本古典文学大系 40　宝物集』所収、岩波書

「『涅槃経』に「所有三千界、男子諸煩悩、合集為一人、女人之業障。女人地獄使、能断仏種子、外面似菩薩、内面如夜叉」」[8] と書かれている。日蓮の『法華題目抄』にも「内典中初成道大法華嚴經云女人地獄使能斷佛種子外面似菩薩内心如夜叉矣雙林最後大涅槃經一切江河必有迴曲一切女人必有諂曲又云所有三千界男子諸煩惱合集為一人女人之業障等云云」[9] と記されている。これについて谷山俊英氏は「鎌倉新仏教開祖の女性観」にて、「日蓮が「諸経に嫌はれたりし女人」の例をあげて、『法華経』こそが唯一絶対の女人成仏教典であることを確言するのである」[10] と論じる一方、中世では女性蔑視観が世に広く流されたこと、及び女性を不浄のものと見なす考え方について鎌倉新仏教の教祖が認めることを読み取っている。

小原仁氏の考察よると、女性の差別文言は九世紀から十世紀にかけて現れるが、この時代の常套句として用いられているにすぎないとしている。天平十三年 (741) に建てられた国分尼寺の正式名称である「法華滅罪之寺」は『法華経』の竜女成仏に依拠するとは見なし難いことや女性の出家が制限されるのは九世紀以降であるということ、さらに願文中に女人滅罪の依拠品として挙げられた提婆達多品は奈良時代においてはまだ流布していないことから踏まえて考えると、やはり九世紀（平安時代前期）が女人差別文言受容の画期であると論じている。[11] 氏は元慶七年（883）に菅原道真が依頼を受けて作成した「為式部大輔藤原朝臣室家命婦逆修功徳願文」中に見られる「道之三塗、身之五障、誠可哀」の一句は提婆達多品に基づくと思われ、貴族社会で最も早い時期に女人差別を受容された文言とすることができると指摘している。翌年の「為藤大夫先妣周忌追福願文」に『転女成仏経』『法華経』などの経典が供養されたことが書かれているものを始め、その後、幾多の願文中に『転女成仏経』『転女身経』『法

店、一九九三年）205 頁。

[8] 『宝物集』にはここを『涅槃経』とする伝本と『華厳経』とする伝本と二系統があった。ここは瑞光寺本を採る。以上、『宝物集』巻第五（『新日本古典文学大系 40　宝物集』所収）212 頁を参照。

[9] 『法華題目抄』（秀英舎、一八八九年）6-7 頁。

[10] 谷山俊英「鎌倉新仏教開祖の女性観」（『国文学解釈と鑑賞』70 巻 3 号所収、至文堂、二〇〇五年）81 頁。

[11] 小原仁「転女成仏説の受容について」（同氏著『中世貴族社会と仏教』所収、吉川弘文館、二〇〇七年）3 頁。

華経』などの経典名が使われている。[12] 寛和元年（986）慶滋保胤が藤原為光の依頼を受けて作成した追善願文である「為大納言藤原卿息女女御修四十九日願文」に「又欲其奈此五障何欲其奈彼五衰何。弟子早引幽霊、偏在極楽。弥陀尊之設蓮台、望上品、又仰下品矣。法華経之説仏果、令我女不異竜女焉。彼即身也、是後身也。何疑哉、何疑哉。人皆有才無才、各言其子。仏願、有罪無罪、定救我児。乃至六趣四生、莫不引接」[13] が綴いてあり、女性には五障があるといわれるが、『法華経』の功徳により、娘も必ず竜女と同じく成仏できることは間違いないと、すでに女性成仏思想が見られ、しかも女性の成仏が確信されている考えが明確に見られる。それに、菅原・慶滋や大江匡房等文人の作ったいずれの願文中には常に「五障」「竜女」などの文言が見られるが、その女人不成仏の論拠についての説明がない、また記し方も定型化しているため、氏は平安時代における女人差別文言の受容のあり方は、単に常套句を繰り返すだけの観念的なものに過ぎないと論じている。[14] この時代は仏教と同じく外来の思想である儒教・倫理の思想を受け、節婦・貞婦観念もあり、その表彰の事績である『三代実録』にも「夫死後。廬於墓側。帰念仏理。守節不移。」「夫死之後。守義不移。造仏写経。晨昏礼拝。」「廬於墓側。為尼持戒。苦行精進。」と書かれてあるように、常套句を繰り返すことも見える。[15] 実際、菅原征子氏の「節婦孝子の表彰と庶民の女性像――古代を中心に――」では、節婦自身にも儒教倫理が受け入れられていないことは明白であることを指摘している。[16] 上述のことから見ると、恐らく儒仏一致の思想は当時の貴族社会における基本的な思想のあり方を示すものであったとして良いであろう。実際状況とは関係なく、ただ女性を語る際に基礎用語として使われ、あたかも女性の普遍的属性でもあるかのごとく語られることになったのであろう。仏典の女人差別文言は儒教の女性観を下地として違和感なく受容されたと推測されようと、氏は論じている。[17]

田中貴子氏によれば、平安時代後期の貴族である大江匡房の『続本朝往生伝』

---

[12] 小原仁「転女成仏説の受容について」（同氏著『中世貴族社会と仏教』所収）2 頁を参照。
[13] 大曾根章介・金原理・後藤昭雄校注『新日本古典文学大系 27　本朝文粋』（岩波書店、一九九二年）370-371 頁。
[14] 小原仁「転女成仏説の受容について」（同氏著『中世貴族社会と仏教』所収）4、8 頁を参照。
[15] 小原仁「転女成仏説の受容について」（同氏著『中世貴族社会と仏教』所収）9-17 頁を参照。
[16] 菅原征子「節婦孝子の表彰と庶民の女性像――古代を中心に――」（『歴史評論』517 号所収、校倉書房、一九九三年）10 頁。
[17] 小原仁「転女成仏説の受容について」（同氏著『中世貴族社会と仏教』所収）16-17 頁を参照。

（源忠遠妻）[18] や三善為康の『後拾遺往生伝』（豊前権守有輔女）[19] に女性が女性の姿のままで往生したと確認される例が見られる。氏は、普通の人が理解した仏教は経論の説く転女成男などという成仏よりも、女身のままの成仏は当然のことであった。僧たちが説く浄土と民間で意識される浄土との間には、かなりの隔たりが存在したのであろう。やはり大多数の女性にとってはそれほど受け止められていなかったと指摘している。

平雅行氏によれば、平安時代には女性を殊更に特別視しない時代である。女性差別観によって次第に侵食されてゆく中にあっても、女性は決して仏教から排除されたのではない。五障の観念と竜女成仏思想とはワンセットになっていることであって、差別観念は「救済」思想と連動して出てくると論じている。[20]

鎌倉時代に至ると女人差別文言が激しくなる。『和歌知顕集』に「一切の法をきくに、女にちかつくを第一の業とせり」[21] と、また鎌倉時代後期に成立された『増纂伊勢物語注　冷泉家流』にも「追、此歌に鬼とあるは、女を云也。其故は、経文に女人獄使能断仏子種、面似菩薩、心如夜叉、此意なるへし（第五十九）」[22] とあるように女性を地獄からの使者、鬼、近づけない存在となり、ただの常套句ではなく、女性を蔑んでいることが顕著に現れている。

第二節　物語における観音変化思想

一　歌舞の菩薩

平安時代後期の『遊女記』には「観音」・「小観音」・「如意」・「香炉」・「孔雀」・

---

[18] 「蔭子源忠遠妻者武蔵守源教之孫也（中略）其後母夢問其生所答諸菩薩中皆大歓喜（中略）或人夢此女着菩薩装束在安楽寺一切経会舞人之中其頭手足不異平生唯舞装相改而已」と、変成男子にしたのでなく、女性の姿のまま往生したことが明確に示している。慶滋保胤等著・赤松皆恩訂正『日本往生全伝２　続本朝往生伝』（永田文昌堂、一八八二年）26-27 頁。

[19] 「女弟子源氏洛陽人豊前権守有輔女也（中略）其後一人子夢見其生所云有鐘堂以瑠璃成之又有重々堂七宝荘厳五色蓮華開敷池中（後略）」と、ここにも出家せずに在俗する女性が女性の姿のまま往生したことを記している。慶滋保胤等著・赤松皆恩訂正『日本往生全伝７　後拾遺往生伝』（永田文昌堂、一八八二年）22-23 頁。

[20] 平雅行「旧仏教と女性」（総合女性史研究会編『日本女性史論集５　女性と宗教』所収、吉川弘文館、一九九八年）157 頁。

[21] 『和歌知顕集　書陵部系統』歓喜光寺蔵（片桐洋一・山本登朗編『伊勢物語古注釈大成』第二巻所収、笠間書院、二〇〇五年）13 頁。

[22] 『増纂伊勢物語注　冷泉家流』鉄心斎文庫蔵（『伊勢物語古注釈大成』第一巻所収）113 頁。

「狛犬」など、遊女が神仏ゆかりの名を付けることは記述されている。何故命名がこのような系統かについて、一般的には遊女は霊力があると暗示していて、彼女らの巫女性質に関わってあると思われている。しかも上級貴族と親しい交流があれば、幾人が寵愛され、貴族の子息を儲けることもある。さほど蔑まれてはいなかったと思われる。

遊女と巫女との関連性については、本論は論述しないが、ただ単に遊女の仕事から考えてみると、恐らく今様に着目したほうが良いであろう。

遊女がよく歌う今様が大半「法文歌」である。法文歌とは仏法を説き明かした経・論・釈など、または信仰の心情などを歌謡化したものである。それ故に今様狂の後白河法皇が『梁塵秘抄』口伝集巻第十に「法文の歌、聖教の文に離れたることなし」[23] と、今様即仏道として考えている。さらに「神社に参りて、今様うたひて、示現を被ることたびたびになる。いちいちこのことを思ふに、声足らずして妙なることなければ、神感あるべき由を存ぜず。ただ、としごろたしなみ習ひたりし劫のいたすところか。またことに信をいたしてうたへる信力のゆゑか」[24] 自分は長年に亘って今様を愛し、歌って、神の示現を蒙ることが何度ある。歌声は絶妙ではないので、神の感応を得る理由がわからないが、多分長年練習を積んできたせいか、信心深いゆえか、と記している。

ここには当時では、少なくとも貴族には今様は霊妙な力が感じられることと、ただ今様を歌うだけでなく、信心の深い人、或いは美声の持ち主が歌うことにより今様の神聖の力が引き出させるというような考えがあると推測できよう。

再び『遊女記』に「皆是倶尸羅之再誕（皆これ倶尸羅の再誕にして）」[25] という記述を想起させた。倶尸羅とは、インドの好声鳥で、ここでは遊女の美声を形容するのである。以上に述べてきたことに従って考えると、遊女も謡曲「東北」の和泉式部も「歌舞の菩薩」と称されたのも無理ではあるまい。

---

[23] 臼田甚五郎・新間進一等訳注『新編日本古典文学全集 42　神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集』（小学館、二〇〇六年）379 頁。
[24] 臼田甚五郎・新間進一等訳注『新編日本古典文学全集 42　神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集』）377 頁。
[25] 大曽根章介等校注『日本思想大系 8　古代政治社会思想』（岩波書店、一九七九年）154 頁。

二　生身の普賢菩薩

遊女観音変化譚として最も代表的なのは、『十訓抄』また『古事談』や『撰集抄』などには性空上人と遊女の話であろう。『和泉式部』にも出てきた書写山の性空上人が、生身の普賢菩薩を拝みたいと日々考えていた。ある夜、神崎の遊女の長者を見るが良いという夢告があった。それを不思議に思いつつ神崎へ赴き、その長者を会いに行った。そしてちょうど宴に仕える長者を見つけた。宴中、長者は鼓を打ち、歌った。上人は深く信心して、ずっと長者を見つめた。すると、たちまちに普賢菩薩の姿が現れ、六本の牙をもつ白い象に乗り、光が放ち、すべての人を照らすのであった。さらにこの世のものとも思われない神妙なる声で、経文を説く。上人は目を開けてみてみると、またもとの通りに長者の姿となり、もとの歌を歌っている。再び目を閉じると、また菩薩の姿となり、経文を説いているのであった。上人は何度も拝んで、感激の涙をこぼしながら帰るとした。長者は席を外し、上人のところへ来て、「このことを誰にも話してはいけません」と言ったとたん、その場で急死した。そして空に妙な香りが漂っていたという。

なお、この霊験譚の構成を裏で支える三つの事を提示したいと思う。まず、性空上人は『法華経』を根本経典とする天台宗の僧であり、即ち『法華経』の持経者である。次に、『法華経』の普賢菩薩勧発品第二十八にはこの経典を受持する者であれば、六本の牙をもつ白い象に乗る普賢菩薩が信者の前に現れて守護する、また、二十一日間この経を専念したなら、普賢菩薩が六牙の白象に乗って、信者の前に出現して法を説き、教え導く、と述べられる。最後に、同経の提婆達多品第十二には女人成仏を述べたため、貴族の女性にも深く信仰されたと言う。[26]

以上の事によれば、何故上人が拝みたい対象が普賢菩薩であること及び普賢菩薩の現れる理由が明らかである。遊女の長者は普賢菩薩の方便身で、彼女が歌うことが即ち普賢菩薩が衆生を教化していることと同じと見做されたと考えられる。

---

[26] 柴崎花苗「「遊女普賢菩薩（江口の君・見立普賢菩薩）図」について―円山派を中心に―」（『文化学研究』第十九号所収、日本女子大学文化学会、二〇一〇年）171 頁。

三　如意輪観音変成玉女事

前章に触れた親鸞が六角堂で救世菩薩の示現を蒙った話をここでもう少し詳しく見てみたい。

六角堂の本尊は如意輪観音であり、「女犯偈」によると、「我成玉女身被犯」とは、我すなわち如意輪観音が高貴の女性に化して僧と交わることである。このような思想は、『覚禅鈔』にも見えることが名畑崇氏によって指摘されている。[27]

『覚禅鈔』は、真言宗小野流の僧である覚禅(康治二年（1143）～不明)が真言密教で行われる修法を修法別に編集したものである。その第三「如意輪末車去車」に次のように記してある。

本尊変王玉女事

又云。若発邪見心。婬欲熾盛可堕落於世。如意輪我成王玉女。為其人親妻妾共生愛。一期生間荘厳以福貴。令造無辺善事。西方極楽浄土。令成仏道莫生疑。云々[28]

（本尊、王の玉女に変ずる事

又云はく。〔もし〕邪見心を発して、淫欲熾盛にして世に堕落すべきに、如意輪我れ王の玉女と成りて、其の人の親しき妻妾となりて共に愛を生じ、一期生の間、荘厳するに福富を以てす。無辺の善事を造らしめ、西方極楽浄土に仏道を成ぜしめん。疑ひを生ずることなかれ云々。）[29]

文意は「もしよこしまな心がおこって、色欲がさかんになり、道心を失ってしまうようなことになれば、如意輪観音がみずから変じて王の玉女となり、その人の妻妾となって愛しあい、一生をけだかく幸せにするであろう。そして数がぎりなく善事を造らしめ、命終の後に西方極楽浄土に仏道を成ぜしめるであ

---

[27] 名畑崇「親鸞聖人の六角夢想の偈について」（真宗連合学会編『真宗研究』第八輯所収、百華苑、一九六三年）60 頁。

[28] 仏書刊行会編『大日本仏教全書第 47 冊　覚禅鈔第三』（名著普及会、一九七八年）181-182 頁。

[29] 彌永信美『観音変容譚――仏教神話学Ⅱ』（法蔵館、二〇〇二年）578-579 頁。

ろう」[30] というのである。

覚禅が何時これを記したかは不明であるが、親鸞のより少々先立つ頃であったと考えられる。[31] しかしながら、両方の趣旨はあまり変わらないと思われる。

田中貴子氏が「本尊変王玉女事」は、親鸞の受けた夢告が突発的に現れたのではなく、鎌倉時代までに、特に密教色豊かな土壌で培われてきた如意輪観音に関する伝承を背景に持ち、女犯という主題に即して蓋然的に浮上したものだということを物語っている、と解釈している。[32] 卓見であると言えよう。何故ならば、密教が平安時代初期に中国・唐に留学した空海（真言宗）・最澄（天台宗）によって伝えられたものだから、早年比叡山に登り、天台宗を学んでいた親鸞が影響を受けていないはずがないからである。

四　小括

すでに第二章第三節にも触れたように、観音の化身した玉女は、修行者の犯した「愛欲の罪」を観音の力で転化し、浄土に往生する「功徳」に転じる役割を担っている。もっと深く解釈していくと、修行者の「愛欲の罪」は玉女に移転したと考える。管見の限りでは、これはまさしく遊女の果たす社会的役割と同様ではあるまいか。そう考えれば、多くの男性の「罪」を背負い、中世に卑賤視されていた遊女は「菩薩の化身」と見做される事も納得できるのである。

第三節　　浄瑠璃物語における仏教思想

一　浄瑠璃物語における即身成仏思想

物語に頻繁に現れる「即身成仏」思想はもともと密教の思想である。だが、

---

[30] 名畑崇「親鸞聖人の六角夢想の偈について」（真宗連合学会編『真宗研究』第八輯所収）60頁を参照。

[31] 西口順子氏によると、「如意輪上」奥書に建久九年（1198）の年紀があり、これとほぼ前後しているかと思われる。従って、この伝承が親鸞の示現の文より先に存在していたと考えられる。西口順子「成仏説と女性――「女犯偈」まで――」（総合女性史研究会編『日本女性史論集5　女性と宗教』所収、吉川弘文館、一九九八年）331頁。

[32] 田中貴子「〈玉女〉の成立と限界」（大隅和雄・西口順子編『シリーズ女性と仏教4　巫女と女神』所収、平凡社、一九八九年）94頁。

平安時代になると、密教だけでなく、浄土教両仏教思想を中心とした複数の仏教信仰（重層信仰）が貴族を始め、広く信仰されていた。つまり当時ではそれらを融合して信仰したとのことである。一口で言うと、平安時代中頃から鎌倉時代初頭にかけて、時代の激動とともに末法到来説の予言により、密教の現世おける即身成仏する思想が人の厭離穢土欣求浄土思想への要望に合わせたため、普及していたと言えよう。[33] 平安時代の即身成仏思想の例として、再び追善願文を見てみたいと思う。先述の「為大納言藤原卿息女女御修四十九日願文」に「法華経之説仏果、令我女不異竜女焉。彼即身也、是後身也。何疑哉、何疑哉」の一句から、たとい自分の娘は竜女のように即身成仏しなくても、死後に疑いなく成仏すると強く願っていることが窺える。また、大江朝綱が天暦元年(947)十一月廿日に書いた願文「為左大臣息女女御修四十九日願文」には、「昔竜女献珠、已証三明於南無垢之界、今弟子揮涕、欲開九品於西極楽之地」[34] があり、「昔竜女献珠」の話はすでに第三章に紹介したが、悟りを開いた竜女は釈迦如来に献珠する僅かな時間より素早く即身成仏したことがこの一句に含まれているのである。即身成仏に対する強い気持ちが願文を通じて明白に現していると思う。

次に『浄瑠璃物語』十二段目に和泉式部が千人と契れば両親及び式部本人が即身成仏するという考え方について論述したい。

密教には「理趣経」という教典があり、とりわけ真言宗では根本経典に位置づけられるものである。理趣経には人間の煩悩、即ち貪・瞋・癡などを全て肯定している。それらをありのままの状態において価値転換をするとき、世の全ての物の本性において汚れないものであることが「理趣経」の主旨である。[35]

最初の大楽の法門においては「十七清浄句」が説かれている。永遠なる安楽の境地はこの十七句で明らかにされている。

> 説一切法清浄句門。所謂妙適清淨句是菩薩位。慾箭清淨句是菩薩位。觸清淨句是菩薩位。愛縛清淨句是菩薩位。一切自在主清淨句是菩薩位。見

[33] 頼富本宏「日本密教の成立と展開」(『シリーズ密教 4　日本密教』所収、春秋社、二〇〇〇年) 49-50 頁を参照。
[34] 大曾根章介・金原理・後藤昭雄校注『新日本古典文学大系 27　本朝文粋』370 頁。
[35] 藤巻一保・神代康隆等『密教がわかる本』(学研パブリッシング、二〇一二年) 117 頁を参照。

清淨句是菩薩位。適悅清淨句是菩薩位。愛清淨句是菩薩位。慢清淨句是菩薩位。莊嚴清淨句是菩薩位。意滋澤清淨句是菩薩位。光明清淨句是菩薩位。身樂清淨句是菩薩位。色清淨句是菩薩位。聲清淨句是菩薩位。香清淨句是菩薩位。味清淨句是菩薩位。何以故。一切法自性清淨故。般若波羅蜜多清淨。(一切法の清浄句門を説きたもう。謂ゆる妙適清淨の句是れ菩薩の位なり。欲箭清淨の句是れ菩薩の位なり。……何を以ての故に、一切の法は自性清淨なるが故に、般若波羅蜜多も清淨なり。)[36]

妙適とは、男女の性交による喜びや楽しみのことを直接に表現した言葉である。いつまでも離れがたくなる思い、思いのままに振る舞い、満足するというごとき悟りの境地は清浄であると、男女の恋愛関係に順序をもって率直に表現しているが、もとより完全なる悟りへの道を例えたものである。しかしよく文字通りに男女が契りによって成仏すると誤解された。こうして密教経典に対しての誤解から遊女に関わる説話が生まれるのであろうか。

末木文美士氏によると、仏教の中には性と生殖の忌避が顕著に見られるが、しかし大乗仏教になると、「愛欲悦楽」をも方便として認めるようになり、やがて『理趣経』など密教において大きく発展するようになる、と論じている。[37]

真言宗の『理趣経』のほか、第三章にも触れていた同じく大乗仏教し属している華厳宗の『華厳経』巻第六十八「入法界品」第三十九に、すでに離欲実際という清浄の法門を成就した婆須蜜多(ヴァスミトゥラー)という遊女がいて、彼女は抱擁接吻で人に悟りに導くという一節が説かれている。中村元氏は、欲情で離欲への道に導く論理を説明しにくいが、恐らく煩悩や欲望を通り抜けて世の中をよく理解する人には、やがて悟りの境地に到達することを示唆しているという。そしてこの話は後の謡曲「江口」や性空上人と普賢菩薩の伝説にも影響を及ぼしていると解釈している。[38]

---

[36] 宮坂宥勝・福田亮『仏典講座 16　理趣経』(厚徳社、一九九〇年) 86-87 頁。
[37] 末木文美士「経典に見る女性」(『国文学解釈と鑑賞』第 69 巻 6 号所収、至文堂、二〇〇四年) 13 頁。
[38] 中村元『現代語訳大乗仏典 5『華厳経』『楞伽経』』(東京書籍、二〇〇三年) 86-87 頁を参照。

二　浄瑠璃物語に見られる観音信仰

第二章に挙げた赤木文庫『浄瑠璃物語』十二段目には実はまだ続きがある。概ねは以下の通りである。

和泉式部と契る千人目として清水坂の坂者が訪ねてきた。式部が最初に拒んだが、男は仏教の女人罪障を説いて式部を動揺させ、両親の為になるのならばと妥協させた。明け方、男は実は清水寺の観音と自ら明かし、大慈大悲の光と共に清水寺の内殿に入ったという。

清水寺の本尊と言えば千手観音である。この物話に直接的関係がないが、中世では愛法と呼ばれる修法が存在する。愛法とは、要するにある異性に愛されることを目的とし、性愛をコントロールする法である。千手観音や愛染明王、如意輪観音を本尊とする愛法が多いと田中貴子氏が『〈悪女〉論』で論及している。[39] 観音は女性の救済者としてしばしば物語に登場するが、ここには五条と清水寺の近さ、また愛法神に繋げることで、清水寺の観音を登場させたのは何らかの意味が隠されているのではないかと連想せずにいられない。

おわりにかえて――女人罪業思想の形成と受容について

さて、先程は物語にての女人罪業思想について言及したが、実際はどのような状況であろうか。今堀太逸氏の研究によると、遊女自身の罪業観が定着するのは十四世紀（鎌倉時代後期）であるという。[40] この点について服藤早苗氏も認めている。[41]

西口順子氏は「平安時代の女性の作品の中には「五障三従」とか「女人の罪業」を深刻に受け止めたものも少なからずある。自分の意志で後生を祈り、出家の道を志した女性たちも多い」、さらに「女人成仏・女人往生の背後には、基層信仰と深くかかわる浄土観があり、女性のままの成仏・往生が現実のものと

---

[39] 田中貴子『〈悪女〉論』（紀伊國屋書店、一九九二年）73 頁。
[40] 今堀太逸「法然の絵巻と遊女（下）――『琳阿本』『古徳伝』『九巻伝』を中心にして――」（仏教大学歴史研究所『鷹陵史学』第 12 号所収、仏教大学、一九八六年）35 頁。
[41] 服藤早苗『古代・中世の芸能と買売春――遊行女婦から傾城へ』（明石書店、二〇一二年）235 頁。

して信じられていたのではなかろうか」。「寺や僧の周辺の人々が理解した仏教は、転女成男などという成仏よりも、女性の姿のままの成仏は当然のことであった。僧たちの経論の解釈は、貴族や貴族の女性にとっては受け入れられたであろうが、大多数の女性にとっては、転女成仏・変成男子説が、実感としてはそれほど深刻に受け止められていなかったのではないかと思われる」[42] と指摘している。野村育世氏の考察によれば、『鎌倉遺文』に見られる男女による寄進状・願文類に仏教的性差別文言（五障や転女成男など）が見られるが、その祈願した文書は約三百五十通中の二十通で、六パーセント弱しかない。[43] 上述から考えると、女人罪業観はあまり当時の社会に反映されなかったと思われる。

私見を述べると、平安時代の女性の考えは西口氏が指摘したような考えであれば、中世に入り、物語を通じて女性蔑視観が浸透し、女性に自分の罪を植え付けさせていったという筋道が見えてくる。当時の女性に普遍的にそのような自覚があるかどうかは判明できないが、とにかくそれを強制的に受け入れさせようとした傾向があったと考えられる。

かかる動向を背景として生み出された遊女観音変化説とは、恐らく末法時代の到来につれ、世道が混沌になり、人々が現世利益を求める中、菩薩が人を導くために方便の女身として情（性）愛で人を導き、成仏させると大乗仏教の教義と融合して作られた一説なのであろう。

上述のような観点が中世に存在していたからこそ、仏教の女人五障説、或いは罪業思想が説かれる一方で、遊女も「菩薩行」を施しているという考え方が生み出されたと考えられる。

それは本論で繰り返し述べてきたように、女性に男性に対する性的奉仕を奨励し強要する、現代では受け入れられない考え方に基づいている。遊女とはその中世に強化された女性蔑視観の結晶のような存在であった。

---

[42] 西口順子「日本史上の女性と仏教――女人救済説と女人成仏をめぐって――」（『国文学解釈と鑑賞』56 巻 5 号所収、至文堂、一九九一年）25 頁。
[43] 野村育世『仏教と女の精神史』（吉川弘文館、二〇〇四年）105-107 頁。

結論

一連の流れから見てみると、恐らく遊女の性的奉仕は仏教の五戒の一つである不邪淫戒と抵触しているという疑問が生じるであろう。しかしながら、中世社会では仏教の戒律を守っているかどうかは疑わしい。『源氏物語』の光源氏の多情・好色が当時の理想像として描かれること、或るいは宣教師であるルイス・フロイス（在日期間 1562-1597）が「日本の女性は処女の純潔を少しも重んじない。それを欠いても、名誉も失わなければ、結婚もできる」「日本では（堕胎は）きわめて普通のことで、二十回も堕した女性があるほどである」[1] と書かれているように、当時の性道徳・貞操観念という感覚が薄かったと言えよう。

遊女は性的奉仕をするのにもかかわらず、文芸作品にて、特に仏教文学作品で結末が観音菩薩の化身や仏に帰依して往生を遂げたことについては一見矛盾があるようだが、実は日本的仏教文化の母性観から解釈を施せば、理に適うであろう。大越愛子氏によれば、日本仏教は、表の女性の性否定と裏の女性による性的救済という奇怪な二重構造である。[2] 仏教は女性を忌避するけれども、女性の母性だけは尊重し、重視している。しかし母性は我々が思う「子を産み育てる母」だけではなく、『和泉式部』が描かれている母子相姦のように、母が子への献身には性的な意味も含められているとのことである。[3] 今成元昭氏も仏教文学の中で、男の淫欲の対象としての女は魔性と母性という存在があり、その母性の典型像は、「露な女の性との係わりに於て求められなければならない」であり、例として挙げられるのは『日本霊異記』「愛欲を生じて吉祥天女の像に恋ひ、感応して奇しき表を示しし縁」[4] に記載されている、男の淫欲を夢で満

---

[1] ルイス・フロイス著・岡田章雄訳注『ヨーロッパ文化と日本文化』（岩波書店、一九九一年）39、50 頁。

[2] 大越愛子・源淳子『解体する仏教—そのセクシュアリティ観と自然観』（大東出版社、一九九四年）117、121 頁。

[3] 大越愛子・源淳子『解体する仏教—そのセクシュアリティ観と自然観』123 頁を参照。

[4] 物語のあらすじとしては凡そ以下の通りである。

聖武天皇の時代、和泉国にある修行者が、吉祥天女の塑像に愛欲を生じ、毎日に「天女の如き容好き女を我に賜へ（天女のような顔のきれいな女をわたしに与えてください）」と願いつづけたところ、夢で天女の像と交わり、翌日その塑像を見ると、衣裳の腰のあたりが不浄（淫水）で汚れていた。修行者はそれを見て恥ずかしくて、「我は似たる女を願ひしに、何ぞ忝クも天女専自ら交りたまふ（わたしは天女さまに似た女が欲しいと願っておりましたのに、どうして畏れ多くも天女御自身がわたしと交接されたのですか）」というエピソードである。

中田祝夫訳注『新編日本古典文学全集 10　日本霊異記』（小学館、一九九五年）159-161 頁。

足させた吉祥天女の如きである。また、「如意輪観音変成玉女事」、「女犯偈」のように、淫欲を起こした男を極楽浄土へ抱き入れる玉女は母性の典型と言わざるを得ないと氏は論じている。[5] 大越氏はこのような母性を「慰安的母性」と言い、さらに日本仏教の性的救済は男性中心主義で、男性が救われない限り女性の救いはないと述べる。女性は男性の救済をもたらすためには、犯されなければならならず、そして男性に献身することで自分も救われる、と論じている。[6] 管見の限り、前章にて触れていた赤木文庫『浄瑠璃物語』や『雀のさうし』に説かれている「千人と契れば即身成仏になる」「恋を受けなかった女は堕地獄とする」概念とは相通じている。若しくはこの思想の上で築き上げられたものかもしれない。

次に、男に性的慰安を与える女性を観音菩薩に喩える理由についてであるが、それは、観音菩薩が女性的存在である部分を内包していると言われているからである。観音菩薩は元々衆生の煩悩の束縛から解脱する救援者である。その三十三応現身には女性の姿が含まれている他、「若有衆生。多於婬欲。常念恭敬。観世音菩薩。便得離欲。（中略）若有女人。設欲求男。礼拝供養。観世音菩薩。便生福徳智慧之男。設欲求女。便生端正有相之女。宿殖徳本。衆人愛敬。（若し衆生ありて婬欲多からんに、常に念じて観世音菩薩を恭敬せば、便ち欲を離ることを得ん（中略）若し女人ありて、設し男を求めんと欲して、観世音菩薩を礼拝し供養せば、便ち福徳・智慧の男を生まん。設し女を求めんと欲せば、便ち端正有相の女の、宿、徳本を殖えしをもて衆人も愛敬せらるるを生まん）」[7] と書かれているように、『法華経』「観世音菩薩普門品第二十五」に観音菩薩は生殖・性的救済とも関連している。また、前章にも述べた通り、密教において如意輪観音、千手観音、十一面観音は女性を化して性の相手となる或いは愛法神という位置に付けられる。衆生の多様な願いを応えて、観音菩薩は性を司る神の一つとして庶民の信仰対象となっていた。[8]

さて、第一章及び第二章には、小野小町・和泉式部伝説における遊女像を述

---

[5] 今成元昭「仏教文学の中の女性」（『国文学解釈と鑑賞』56 巻 5 号所収、至文堂、一九九一年）17-18 頁。
[6] 大越愛子・源淳子『解体する仏教―そのセクシュアリティ観と自然観』110 頁。
[7] 坂本幸男・岩本裕訳注『法華経（下）』（岩波書店、一九六七年）246、248 頁。
[8] 大越愛子・源淳子『解体する仏教―そのセクシュアリティ観と自然観』114 頁を参照。

べてきた。二人とも遊女として見做されていたが、結末に小町は乞食の老女・観音の化身とされ、式部は遁世者・歌舞の菩薩とされる傾向が多く見られる。

どうしてこのような相違が生じるかということについて、私見を述べさせたい。まず、両章節に挙げられていた伝説を通して仏教思想が日本中世社会・思想への浸透は一目瞭然である。そしてこの二人を代表にして作り上げてきた遊女像は仏教思想の上で展開していくのも明らかである。彼女らへの描写は恐らく世間が遊女に対する主な見方を示していると思われる。これについて本研究で検討した結果を次のようにまとめておく。

第一は、名高い二大女流歌人の名を借りる意味としては、遊女は才色兼備で歌の徳があり、教養を富んでいる以外、やはり遊女を美化しているものと考えられる点である。二人は容姿端麗で、恋歌が多く且つ優れ、恋にまつわるエピソードも少なくない。情を交わさないクールビューティー、または身心共捧げるやさしい、いわゆる「おっとりさん」という両タイプは、どちらも遊女像として男性の憧憬の対象であろう。

第二は、観音の化身とされることは遊女を美化することにつながると考えられる点である。中世の社会背景をもとにし、この遊女観音変化譚には三つの類型に分けられる。伝説に見られる小町・式部の男性に対する献身的行為が「菩薩行」に見做されたことは、大乗仏教の煩悩肯定思想や情愛で人を導き方便と融合して作られたものであることが考えられる。また、遊女を菩薩の「方便の身」に見えたことは、僧侶の深い信心により、遊女の身に投射したことが考えられる。さらに遊女の歌う法文歌や舞踊に神秘な力を持つ意味から、「歌舞の菩薩」と形容されたこともある。遊女が文芸作品を通して遊女の存在価値を見出され、仏教や男性にとって重要な意義が付与されていたことを考えてみると、当時の社会では無くてはならない存在であったと言えよう。

第三は、女人救済に、仏教側による女人布教という目的が見られた点である。すでに前章に述べたように、遊女は、この混沌の世間にて色で人を成仏の道へ導き、そして誰にでも身体を委ねることは、三十三種の化身を持ち、いつもやさしく衆生を守り、衆生を救う慈愛なる観音菩薩の性格に似ていた。この遊女観音説がかなり流布し、近世の文芸作品にも取り入れた。その顕著な例として、江戸時代の浄瑠璃作者である近松門左衛門の著した『曽根崎心中』に遊女お初

が観音の化身を暗示している[9]、浅井了意の著した『浮世物語』[10]や『元のもくあみ』[11]等の作品が挙げられる。これらは中世の文学観点に基づいて、さらに大きく発展してきたとも言えよう。

しかしながら、かかる美化は遊女の印象を向上させなかった。女性蔑視の傾向で女人不成仏の説が中世から拡大されていき、鎌倉新仏教の法然・親鸞・日蓮等は新しい教義を普及させ、多くの人、とりわけ女性に信仰されるために女人救済を説くようになったと考えられる。大越愛子氏によると、平安時代に末法思想や地獄の思想の流行が女性に多大な影響をもたらしたと考えられている。女性の性は生殖のほか、男性を狂わせる力を持つことが源信の『往生要集』の

---

[9] 『曽根崎心中』冒頭の「観音めぐり」の最後に

> さしもぐさ、草のはすはな世に交じり。三十三に御身を変へ、色で。導き、情けで教へ。恋を菩提の橋となし。渡して救ふ観世音、誓ひは。妙に有難し。

明るい未来もお金も面目も失い、途方に暮れた情けない主人公・徳兵衛に「色で導き、情けで教え」てくれた遊女お初は、その姿がまるでこの観音菩薩の形象にふさわしいではあるまいか。(鳥越文蔵・山根為雄訳注『新編日本古典文学全集 75　近松門左衛門集②』、小学館、一九九八年、18 頁)

[10] 『浮世物語』とは、浅井了意によって書かれ、寛文五年（1665）に刊行された仮名草子である。巻第一「五　傾城の事」には、次のように記している。

> いにしへ江口の長は、普賢菩薩の化身にて、往き来の人に相馴れて仏道の縁を結ばれしが、花厳経には、「五十五人の知識の中に婆須蜜多女と申せしは淫女にておはせし」と説かれしを、思ひ合せて奇特なり。

第四章第二節にも触れた性空上人と生身の普賢菩薩の伝説は江戸時代にも知られていたが、ここでは遊女が歌舞の菩薩から色道の菩薩に変容されていた。「傾城の事」を通じて近世では遊女菩薩化身説が中世より強まっていることがわかる。佐伯順子『遊女の文化史』(中公新書、一九八七年、89-90 頁）を参照。(神保五弥等訳注『日本古典文学全集 37　仮名草子集・浮世草子集』、小学館、一九九一年、159 頁)

[11] 『元のもくあみ』とは、江戸時代成立された仮名草子である。作者は不明であるが、刊記は延宝 8 年(1680）である。311-312、316 頁には、次のように記している。

> 高尾の君は揚屋が座敷へ影向あり。……御声は、迦陵頻の囀りは、……まことに東方浄瑠璃世界におはします。薬師仏のこの娑婆へ、御来迎こそましまして……
>
> はや床入りとありければ、高尾の君は木阿弥が手をとりて、床の間さして御出でありしよそほひは、唐の玄宗皇帝の貴妃に御手をひかれ給ひ、又は衆生の善人を、歌舞の菩薩の紫雲に乗り、音楽をはやしたて、観音菩薩は蓮華をさしのべて、これへこれへと救ひ給ふもかくやらん。

主人公の木阿弥は高尾太夫（遊女）と対面し、交わることを夢の中で見た。高尾太夫のことを神仏に扱われているのを窺えるし、しかも観音菩薩が衆生を救いの情景に譬えられている。佐伯順子『遊女の文化史』を参照。(神保五弥等訳注『日本古典文学全集 37　仮名草子集・浮世草子集』)

衆合地獄に描かれている[12] 。そのほか、地獄の様相は屏風絵、寺院壁画や絵草紙などにも描き出された。女性の愛欲は堕地獄になる罪業を女性に認識させ、実際、その苦しみは『和泉式部日記』、『蜻蛉日記』、『源氏物語』など女性作家自身によって書き出されていると氏は論じている。[13]

野村育世氏は『鎌倉遺文』に記録された鎌倉時代の女性達の寄進状・願文から当時の社会全般の女性達が仏教を如何に解釈し、信心していたかについて論じているが、そこで氏は「女性罪業観の影響が少なかった」と述べている。氏は当時の女性達が竜女成仏を女人成仏の範とした例はなかったと判明し、さらに女人が女人罪業観の受け入れはもっと後の時代であろうと指摘している。[14] 十五世紀末から十六世紀初頭（室町時代後期）には、血盆経信仰や血の池地獄という考え方が始まる時期であり、女性と仏教における重要な画期と思われる。[15] 仏教の女性罪業観は元々女性にそれほど多く受け入れなかった。女性自身がこのことに言及している例は貴族の女性や願文に見られるが、深刻に受け止められていなかったと思われる。従って、これはやはり仏教側や男性側からの押し付けに影響されたことは否めないであろう。

なぜ仏教では女性の中に遊女を救済の対象に選んだかというと、恐らく彼女は中世以降の社会では卑賤視されていたからと思われる。『梁塵秘抄』に後白河院は遊女たる罪悪深きものでも救済されるのなら、いわんや自分をや[16] と描写

---

[12] 源信『往生要集　巻上』に次のように書いてある。

> 三に衆合地獄とは、黒縄の下にあり。縦広、前に同じ。
> （中略）
> またふたたび獄卒、地獄の人を取りて、刀葉の林に置く。かの樹の頭を見れば、好き端正厳飾の婦女あり。かくの如く見已りて、即ちかの樹に上るに、樹の葉、刀の如くその身の肉を割き、次いでその筋を割く。かくの如く一切の処を劈き割いて、已に樹に上ることを得已りて、かの婦女を見れば、また地にあり。欲の媚びたる眼を以て、上に罪人を看て、かくの如きの言を作す、「汝を念ふ因縁もて、我、この処に到れり。汝、いま何が故ぞ、来りて我に近づかざる。なんぞ我を抱かざる」と。罪人見已りて、欲心熾盛にして、次第にまた下るに、刀葉上に向きて利きこと剃刀の如し。前の如く遍く一切の身分を割く。既に地に到り已るに、かの婦女はまた樹の頭にあり。罪人見已りて、また樹に上る。かくの如く無量百千億歳、自心に誑かされて、かの地獄の中に、かくの如く転り行き、かくの如く焼かるること、邪欲を因となす。（後略）

以上、石田瑞麿校注『日本思想大系 6　源信』（岩波書店、1970 年）15-16 頁。

[13] 大越愛子・源淳子『解体する仏教―そのセクシュアリティ観と自然観』81-130 頁を参照。

[14] 野村育世『仏教と女の精神史』（吉川弘文館、二〇〇四年）133 頁。

[15] 野村育世『仏教と女の精神史』159 頁。

[16] その原文としては、下記の通りである。

するように、遊女が罪悪深き身だからこそ手本に選ばれたのだと思う。そして社会でも遊女は次第に卑賤な地位に位置づけられていくが、一方で仏教では女人救済の手本として仏教の奇跡を証明するための不可欠な存在とも認識されていく。

それでは、本論の各章をまとめておきたい。

本論では仏教視点から中世伝説、とりわけ小野小町・和泉式部伝説に見られる遊女像について述べてみた。

第一章では、平安時代前期の女流歌人である小野小町伝説における遊女像を述べてきた。小町を遊女とする嚆矢は、平安時代後期に成立したといわれる『玉造小町子壮衰書』である。その後、室町時代に入ると、小町は明確に遊女と描かれるようになり、遊女としてのイメージが定着していくこととなり、また、遊女小町を観音菩薩の化身とする「観音菩薩変化」譚をも加えることとなった。小町遊女伝説を通じて「遊女成仏」譚から「遊女観音変化」譚への進化過程をも見えてくる、という見解を示した。

第二章は、平安時代中期の女流歌人・和泉式部伝説における遊女像を述べてきた。小町と同じく室町時代に入ると、式部も明確に遊女と描かれるようになり、遊女としてのイメージが定着していくこととなった。しかしながら、小町の「観音菩薩変化」譚とは違い、彼女は仏教側の女人救済のモデルとして写しあらわられた。そのため、物語には母子相姦、因果の苦等罪深い要素を加わり、その最後に仏教の力によって罪障が消滅し悟りに至ったのである。このような伝説を通じて遊女は男性への献身的奉仕、及び男性の欲望を成就するために苦を背負う菩薩行をする側面に垣間見えることができた。

第三章では、仏教と女性との関連性を示した。仏教公伝してから特に女性に篤く信仰された『法華経』には竜女成仏を説く提婆達多品・勧持品などがあり、成仏し難いとされる女性にとってこの経は大きい救いと位置づけられた。また、

その故は、遊女のたぐひ、舟に乗りて波の上に浮び、流れに棹をさし、着物をかざり、色をこのみて、人の愛念をこのみ、歌をうたひても、よく聞かれんと思ふにより、ほかに他念なくて、罪にしづみて、菩提の岸にいたらむことを知らず。それだに、一念の心おこしつれば、往生しにけり。まして我らはとこそおぼゆれ。

以上、臼田甚五郎・新間進一等訳注『新編日本古典文学全集 42　神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集』（小学館、二〇〇〇年）379 頁。

菩薩の大慈大悲な形象及び三十三種の化身を持ち、衆生済度のために色で導くことが経典に述べられているゆえ、後に文芸作品に持ち込まれ、遊女の身に重なり合わせ、遊女観音変化譚などの発展を促した。

第四章において、かかる伝説に見られる仏教思想について論じてみた。仏教伝来以降、日本の思想文化に深く影響をもたらし、本論に取り上げられた伝説にもほとんど仏教色彩に染められている。そして伝説には女人罪業思想だけでなく、密教の煩悩肯定思想及び即身成仏思想が融合していることから当時では重層信仰であったことをも見られる。小原仁氏の指摘によれば、女性蔑視観が常套句に過ぎないとのことは平安時代中期に成立した願文から見ると明らかである。従って、女人差別観を社会に受け入れたのが鎌倉時代に推定できよう。当時では経典にでも女人は不浄の身・煩悩の源と看做し、伝説にも女性の罪を説き、女人蔑視観を強く押し通すことも見られる。その一方、遊女観音変化譚を生み出したのも鎌倉時代であった。この遊女観音変化説は恐らく三種の遊女類型から作られていると推測した。第一、遊女のよく歌う法文歌が仏法を説き明かし歌で、それを客前で披露することは人々に教化することに等しいという見方であることと、第二、観音が女性を化して男性の淫罪を消滅する行為が遊女が社会で果たしている役割に等しいという見方である。第三、僧侶の信心により菩薩を遊女の身に投射することである。これによって、仏教の視座から中世の文芸作品、とりわけ小野小町及び和泉式部における遊女像を見られる遊女観を論じてみたのである。

これらの伝説に付与された意義としては、凡そ以下のようにまとめられるのであろう。第一、中世の理想の遊女像が窺えることである。小町・式部二人の性格及び伝説にての描写を融合して見てみると、恐らく次のような遊女像が見られるであろう。若いころから名高い美人で歌に優れ、誰にでも拒まず、慰めを求めてきた相手の要望を答え、偽りの情愛を施していた。ところが、歳を重ねていくと次第に情け深く人になり、相手の思いを知ったら自ら会いに行くやさしき遊女になる。老後仏教に帰依し、女人として遊女としての罪を知り、懺悔にして最後に素懐を遂げる、という中世の理想な遊女像を繋ぎ合わせるであろう。第二、仏教が中世の庶民社会への伝教手段を見られることである。ただ口頭で教義を伝達するだけでなく、物語を作り上げ、それを通じて民衆に広く

布教し、現世利益を求める人、或いは後世に不安を抱いた人の心を鷲掴みにしたと思う。物語に現れる成仏思想、即身成仏思想は天災人災の続いていた中世社会に不安を抱いた老若男女を問わずに希望の曙光が差し伸べたであろう。第三、女性蔑視観を受容された女性に後世の希望を与えること。仏教側や男性側から強く押し付けた女性差別観は時代の推進とともに拡大されていく。女人を差別しながら女人を救済する二面性構造を持っている。大乗仏教の即身成仏思想のほか、中世鎌倉新仏教教祖の法然・親鸞が伝統観念を破り、庶民階層へ接近し、一般女性に仏法を説き、「他力本願」「悪人正機説」を提唱し、当時社会では見くびられている遊女を救済のモデルとし、女性だとしても仏に帰依するのなら必ず救われるというメッセージを物語に含んでいると考えられる。

國立政治大學 National Chengchi University

参考文献

一　基本文献（五十音順）

【日本語】

浅見和彦訳注『新編日本古典文学全集 51　十訓抄』小学館、一九九七年

池田亀鑑・岸上慎二等校注『日本古典文学大系 19　枕草子・紫式部日記』岩波書店、一九五八年

石田瑞麿校注『日本思想大系 6　源信』岩波書店、1970 年

岩野真雄編『国訳一切経　印度撰述部　阿含部九・十』大東出版、一九六九年

『右記』（大正新脩大蔵経刊行会編『大正新脩大蔵経』第七十八巻　続諸宗部九所収）大蔵出版、一九九二年

臼田甚五郎・新間進一等訳注『新編日本古典文学全集 42　神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集』小学館、二〇〇六年

大島建彦訳注『新編日本古典文学全集 36　御伽草子集』小学館、一九九二年

大曽根章介・家永三郎等校注『日本思想大系 8　古代政治社会思想』岩波書店、一九七九年）

大曾根章介・金原理・後藤昭雄校注『新日本古典文学大系 27　本朝文粋』岩波書店、一九九二年

大橋俊雄校注『法然上人絵伝（下）』岩波書店、二〇〇二年

片桐洋一・福井貞助等訳注『新編日本古典文学全集 12　竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』小学館、一九九四年

『開目抄』下（『新編日蓮大聖人御書全集』所収）創価学会、一九五二年

小泉弘・山田昭全校注『新日本古典文学大系 40　宝物集』岩波書店、一九九三年

小町谷照彦校注『新日本古典文学大系 7　拾遺和歌集』岩波書店、一九九〇年

小山弘志・佐藤健一郎訳注『新編日本古典文学全集 58　謡曲集 1』小学館、一九九七年

坂本太郎・家永三郎等校注『日本古典文学大系 68　日本書紀下』岩波書店、一

九六五年
坂本幸男・岩本裕訳注『法華経（上）・(中)・(下)』岩波書店、一九六二年・一九六四年・一九六七年
神保五弥等訳注『日本古典文学全集 37　仮名草子集・浮世草子集』小学館、一九九一年
「千日尼御前御返事」(『新編日蓮大聖人御書全集』所収）創価学会、一九五二年
『増纂伊勢物語注　冷泉家流』鉄心斎文庫蔵（片桐洋一・山本登朗編『伊勢物語古注釈大成』第一巻所収）笠間書院、二〇〇四年
大正大学綜合仏教研究所梵語仏典研究会編『梵藏漢対照『維摩經』』大正大学出版会、二〇〇四年
橘健二・加藤静子訳注『新編日本古典文学全集 34　大鏡』小学館、一九九六年
田村芳朗・藤井教公『仏典講座 7　法華経上』大蔵出版、一九八八年
栃尾武校注『玉造小町子壮衰書』岩波書店、一九九四年
鳥越文蔵・山根為雄訳注『新編日本古典文学全集 75　近松門左衛門集②』小学館、一九九八年
中田祝夫訳注『日本古典文学全集 6　日本霊異記』小学館、一九七五年
中田祝夫訳注『新編日本古典文学全集 10　日本霊異記』小学館、一九九五年
中村義雄・小内一明等校注『新日本古典文学大系 42　宇治拾遺物語・古本説話集』岩波書店、一九九〇年
西下經一等校注『日本古典文学大系 20　土左・かげろふ・和泉式部・更級』岩波書店、一九五七年
樋口芳麻呂・久保木哲夫訳注『新編日本古典文学全集 40　松浦宮物語・無名草子』小学館、一九九九年
藤井教公『仏典講座 7　法華経下』大蔵出版、一九九二年
仏書刊行会編『大日本仏教全書第 47 冊　覚禅鈔第三』名著普及会、一九七八年
『発心集』(大曽根章介・久保田淳編『鴨長明全集』所収）貴重本刊行会、二〇〇〇年
『法華題目抄』秀英舎、一八八九年
峯村文人訳注『新編日本古典文学全集 43　新古今和歌集』小学館、一九九五年

宮坂宥勝・福田亮『仏典講座 16　理趣経』厚徳社、一九九〇年
横山重・松本隆信編『室町時代物語大成第七』角川書店、一九七九年
『和歌知顕集　書陵部系統』歓喜光寺蔵（片桐洋一・山本登朗編『伊勢物語古注釈大成』第二巻所収）笠間書院、二〇〇五年
慶滋保胤等著・赤松皆恩訂正『日本往生全伝２　続本朝往生伝』永田文昌堂、1882 年
慶滋保胤等著・赤松皆恩訂正『日本往生全伝７　後拾遺往生伝』永田文昌堂、1882 年

【中国語】

『大方廣佛華嚴經（八十華嚴）』下冊、台北市：財團法人佛陀教育基金會、二〇一三年
全佛編集部編『増一阿含經』第六冊、台北市：全佛文化出版社、一九九七年
袁愈嫈・唐莫堯訳『詩經』上、台北市：台灣古籍出版、一九九六年

二　専門書（五十音順）

網野善彦『中世の非人と遊女』講談社学術文庫、二〇〇五年
網野善彦・後藤紀彦共同編集『週刊朝日百科３　日本の歴史・中世Ⅰ－③遊女・傀儡・白拍子』朝日新聞社、二〇〇二年
今関敏子『〈色好み〉の系譜――女たちのゆくえ』世界思想社、一九九六年
彌永信美『観音変容譚――仏教神話学Ⅱ』法蔵館、二〇〇二年
大越愛子・源淳子『解体する仏教―そのセクシュアリティ観と自然観』大東出版社、一九九四年
大隅和雄『中世仏教の思想と社会』名著刊行会、二〇〇五年
大和岩雄『遊女と天皇』白水社、一九九三年
沖浦和光『「悪所」の民俗誌――色町・芝居町のトポロジー』文藝春秋、二〇〇六年
佐伯順子『遊女の文化史』中央公論新社、一九八七年

佐藤弘夫等編『概説日本思想史』ミネルヴァ書房、二〇〇五年
滝川政次郎『遊行女婦・遊女・傀儡女』至文堂、一九六五年
滝川政次郎『遊女の歴史』至文堂、一九六五年
田中貴子『〈悪女〉論』紀伊國屋書店、一九九二年
崔　恵珍『和泉式部・小野小町の人物像の比較研究：平安歌人から中世遊女までの人物像変遷について』大谷大学大学院研究科仏教文化専攻博士論文、二〇〇六年
中村　元『現代語訳大乗仏典 5『華厳経』『楞伽経』』東京書籍、二〇〇三年
中山太郎『売笑三千年史』パルトス社、一九八四年
野村育世『仏教と女の精神史』吉川弘文館、二〇〇四年
濱中　修『女神たちの中世物語』新典社、二〇一一年
速水　侑編『観音信仰』雄山閣、二〇〇七年、オンデマンド版
服藤早苗『古代・中世の芸能と買売春――遊行女婦から傾城へ』明石書店、二〇一二年
藤巻一保・神代康隆等著『密教がわかる本』学研パブリッシング、二〇一二年
前田善子『小野小町』三省堂、一九四三年
細川涼一『女の中世　小野小町・巴・その他』日本エディタースクール出版部、一九八九年
柳田國男『定本柳田國男集第四巻』筑摩書房、一九六三年
柳田國男『定本柳田國男集第八巻』筑摩書房、一九六二年
ルイス・フロイス著・岡田章雄訳注『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波書店、一九九一年
脇田晴子『女性芸能の源流：傀儡子・曲舞・白拍子』角川書店、二〇〇一年
脇田晴子『日本中世女性史の研究―性別役割分担と母性・家政・性愛―』東京大学出版会、一九九二年

三　論文（五十音順）

今関敏子「〈色好み〉の流浪――小野小町の運命」（『文学』3 巻 1 号所収）岩波

書店、二〇〇二年
今成元昭「仏教文学の中の女性」(『国文学解釈と鑑賞』56 巻 5 号所収) 至文堂、一九九一年
今堀太逸「法然の絵巻と遊女（下）――『琳阿本』『古徳伝』『九巻伝』を中心にして――」(『鷹陵史学』第 12 号所収) 仏教大学、一九八六年
大島由紀夫「『和泉式部縁起』――阿弥陀信仰の主人公――」(『国文学解釈と鑑賞』第六十巻八号所収) 至文堂、一九九五年
小田幸子「小野小町変貌――説話から能へ――」(『日本文学誌要』84 号所収) 法政大学国文学会、二〇一一年
小原　仁「転女成仏説の受容について」(同氏著『中世貴族社会と仏教』所収) 吉川弘文館、二〇〇七年
小野恭靖「『琴腹』研究ノート」(『日本アジア言語文化研究』第六号所収) 大阪教育大学日本・アジア言語文化学会、一九九九年
小峯和明「中世説話の小町」(『国文学解釈と鑑賞』60 巻 8 号所収) 至文堂、一九九五年
勝浦令子「女性と仏教」(末木文美士等編『新アジア仏教史 11　日本Ⅰ　日本仏教の礎』所収) 佼成出版社、二〇一〇年
栗原広海「親鸞の女性観」(日本仏教学会編『仏教と女性』所収) 平楽寺書店、一九九一年
桑名貫正「日蓮聖人の女性観」(日本仏教学会編『仏教と女性』所収) 平楽寺書店、一九九一年
小谷野敦「「聖なる性」の再検討」(『日本研究』第 29 集所収) 国際日本文化研究センター、二〇〇四年
佐々木孝二「御伽草子「小町草紙」論」(『国文学解釈と鑑賞』60 巻 8 号所収) 至文堂、一九九五年
定方　晟「仏教における階級観と女性観」(宮田登編『大系仏教と日本人 8　性と身分』所収) 春秋社、一九八九年
柴佳世乃「『和泉式部』――室町期における物語の広がり――」(『国文学解釈と鑑賞』61 巻 5 号所収) 至文堂、一九九六年
柴佳世乃「中世説話集に描かれた和泉式部――「くらきより」歌の受容と説話

形成――」（『国文学解釈と鑑賞』第 60 巻 8 号所収）至文堂、一九九五年
柴崎花苗「「遊女普賢菩薩（江口の君・見立普賢菩薩）図」について―円山派を中心に―」（『文化学研究』第十九号所収）日本女子大学文化学会、二〇一〇年
末木文美士「経典に見る女性」（『国文学解釈と鑑賞』第 69 巻 6 号所収）至文堂、二〇〇四年
菅原征子「節婦孝子の表彰と庶民の女性像――古代を中心に――」（『歴史評論』517 号所収）校倉書房、一九九三年
鈴木　登「平安朝に於ける遊女の研究」（一）・（二）・（三）（『社会史研究第九巻三・四・五号』所収）日本学術普及会、一九二三年
平　雅行「旧仏教と女性」（総合女性史研究会編『日本女性史論集 5　女性と宗教』所収）吉川弘文館、一九九八年
高嶌正人「七、八世紀における法華経信仰の受容と展開」（勝呂信静編『法華経の思想と展開』所収）平楽寺書店、二〇〇一年
田中貴子「〈玉女〉の成立と限界」（大隅和雄・西口順子編『シリーズ女性と仏教 4　巫女と女神』所収）平凡社、一九八九年
谷山俊英「鎌倉新仏教開祖の女性観」（『国文学解釈と鑑賞』70 巻 3 号所収）至文堂、二〇〇五年
崔　恵珍「和泉式部像の再検討――中世後期に変化する和泉式部像の一考察――」（『文藝論叢』第六十五号所収）大谷大学文芸学会、二〇〇五年
豊永聡美「中世における遊女の長者について」（安田元久先生退任記念論集刊行委員会編『中世日本の諸相』下巻所収）吉川弘文館、一九八九年
中井真孝「法然諸伝に見える遊女教化譚――『行状絵図』と『九巻伝』の前後関係――」（宮林昭彦教授古稀記念論文集『仏教思想の受容と展開』第一巻所収）山喜房佛書林、二〇〇四年
中村直美「遊女考―『法然上人行状絵図』・『和漢朗詠注』―」（『佛教大学大学院紀要』36 号所収）佛教大学、二〇〇八年
名畑　崇「親鸞聖人の六角夢想の偈について」（『真宗研究』第八輯所収）百華苑、一九六三年
西口順子「日本史上の女性と仏教――女人救済説と女人成仏をめぐって――」

（『国文学解釈と鑑賞』56 巻 5 号所収）至文堂、一九九一年
西口順子「成仏説と女性――「女犯偈」まで――」（総合女性史研究会編『日本女性史論集 5　女性と宗教』所収）吉川弘文館、一九九八年
濱中　修「『小町草子』――乞食と菩薩――」（『国文学解釈と鑑賞』61 巻 5 号所収）至文堂、一九九六年
濱中　修「御伽草子『和泉式部』『小式部』論」（『国文学解釈と鑑賞』第 60 巻 8 号所収）至文堂、一九九五年
福原隆善「法然上人の女人往生論」（日本仏教学会編『仏教と女性』所収）平楽寺書店、一九九一年
松田　修「古代～近世　聖と俗のデュアリズム」（『国文学：解釈と教材の研究』23 巻 4 号所収）学灯社、一九七八年
吉野瑞恵・松岡智之・岡田安芸子「平安時代における女性の罪をめぐる言説の流布と変容――願文を起点として――」（『駿河台大学論叢』第 45 号所収）駿河台大学、二〇一二年
頼富本宏「日本密教の成立と展開」（立川武蔵・頼富本宏編『シリーズ密教 4　日本密教』）春秋社、二〇〇〇年
渡辺秀夫「小野小町愛の地獄――「玉造小町子壮衰書」」（『国文学：解釈と教材の研究』28 巻 9 号所収）学灯社、一九八三年

四　辞書（五十音順）

『日本国語大辞典』第二版・第七巻（小学館、二〇〇一年）
『日本古典文学大辞典』第一巻（岩波書店、一九八三年）
『日本歴史地名大系』第 25 巻・滋賀県の地名（平凡社、一九九一年）

五　インターネット

狩野晴川・狩野勝川『職人尽歌合』中巻（模本）、江戸時代、東京国立博物館蔵。出典：http://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0045417　（最終閲覧

時間：2013 年 6 月 15 日）

謝辞

本論文をまとめるにあたり、終始暖かい激励とご指導、ご鞭撻を賜りました政治大学日本語文学系助理教授 永井隆之博士に心から深甚の謝意を表します。

学位論文審査において、貴重なご指導とご助言をいただきました淡江大学日本語文学系助理教授 内田康博士に心より深く感謝致します。

論文の中間審査及びテーマ発表において、数多くのご助言、ご指導をいただきました政治大学日本語文学系教授 于乃明博士、同 教授 傅琪貽博士に心より深くお礼申し上げます。

政治大学日本語文学系教授 徐翔生博士には研究あるいは授業科目に関して多大なるご指導をいただきました。それだけではなく、先生のアシスタントとして勤めさせていただきましたこの三年弱の間、大変お世話になりました。私のことを実の娘のように可愛がってくださいまして、本当に幸せです。心から深甚の謝意を表します。

大学学部学生時代に、日本歴史・思想文化を一から教えてくださいました淡江大学副教授 劉長輝博士に心より感謝申し上げます。

修士課程在学中、同窓生の徐欣瑜さんを始め、逐次名をあげないが、皆さんの存在が研究を進めていく上で､大きな励みとなったことをここに記すともに、心より感謝申し上げます。

奨学金を提供し、日本にて史料・資料収集を行かせていただきました（財）真如苑佛教會のご支援をいただきましたことをここに記して感謝致します。

また、研究を進めるにあたり、ご助言、ご支援をいただきながら、ここにお名前を記すことが出来なかった多くの方々に心より感謝申し上げます。

最後に、これまで私を暖かく応援してくださいました両親といつも心の支えになってくださいました兄に心から感謝の意を表します。

國立政治大學 National Chengchi University